



公立大学法人 福井県立大学

Fukui Prefectural University

ファカルティ・ディベロップメント 報告書 2011

2012 年 3 月

教育学習支援チーム

はじめに

本学が 2007 年に公立大学法人に移行して以降、従来の FD 委員会は「教育・学習支援チーム」として再編され、引き続き授業評価、研修会への参加、外部講師を招いての講習会、公開授業の拡大など積極的な取り組みが行われてきました。この間、ご協力いただいた学生・教職員の方々にはこの場をお借りして感謝の意を表したいと思います。

しかし、本学の授業評価には、依然として改善の余地が残されていることも認めざるを得ません。教育担当副学長として、過去 2 年間の取り組みを通じてこのことを痛感しています。とくに 2010 年度のチーム会議では、「FD 活動もそろそろステップアップする時期に来ているのではないか」、「授業評価結果を第三者評価にゆだねる必要があるのではないか」、「授業評価の低い教員への何らかの対応が必要なのではないか」、「学生の自由記述欄には取り上げるべき重要な指摘があるのではないか」、「授業評価結果に対して教員はきちんとコメントを返すべきではないか」といった問題提起を行いました。これらの意見のうちいくつかの項目については、各部局での議論をお願いしたところではありますが、各部局での議論は概ね否定的なものであったように見受けられました。

結局、2011 年度に行った新しい試みとしては、授業評価に対する全教員のコメント欄を設け、コメントが行われなかった場合にも空欄のままホームページに掲載するというものにとどまりました。この新しい試みについては、平成 23 年度前期授業評価アンケートへのコメント回答率（全体平均）は、22 年度前期の回答率 37.4% から 79.4% へと飛躍的に改善されました。しかしながら、この試みとて、改善といえるほどのものではなく、本来は当然のことと言えなくもありません。2011 年 8 月に小浜キャンパスで開催された FD 研修会に至っては、福井キャンパス（テレビ講義）の教員参加はわずか 3 名でしかありませんでした。

周知のように、本年 4 月からは、新しい教員評価制度が試行されることになっています。さらに 2013 年 4 月からは次期中期目標・中期計画もスタートします。これらの中で、教育の質の向上・教育力の向上は最重要課題になることは明らかなです。具体的には、FD 研修会の強化や公開授業・授業参観の改善などが取り上げられるのではないかと思います。

大学を取り巻く社会的な環境が一段と厳しくなる中で、われわれとしても早急に主体的な取り組みを示す必要に迫られております。本報告書をたたき台として、教員の皆様一人ひとりが、改めてこの問題について考えていただきたいと切に願っております。

最後になりましたが、本報告書の取りまとめにご努力いただいたチーム委員・事務局の皆様とリーダーを務めていただいた加藤久晴先生に、心よりお礼申し上げます。

2012年3月

教育・学習支援チーム代表 坂田幹男

目次

はじめに	i
1. 活動概要	1
1.1 委員の構成	1
1.2 会議録	1
1.3 FD 事業経費	13
1.4 事業の実施状況	14
1.4.1 授業評価	14
1.4.2 授業公開	23
1.4.3 FD 研修	24
2. 各部局の FD 活動	25
2.1 経済学部	25
2.1.1 授業評価	25
2.1.2 授業公開	25
2.1.3 外書講読担当者懇談会	27
2.2 生物資源学部	29
2.2.1 授業評価	29
2.2.2 授業公開	29
2.2.3 授業改善のための意見交換会	32
2.2.4 授業改善のための工夫	35
2.2.5 FD 研修	38
2.3 海洋生物資源学部	40
2.3.1 授業評価	40
2.3.2 授業公開	40
2.3.3 FD 研修	41
2.4 看護福祉学部	42
2.4.1 授業評価	42
2.4.2 授業公開	42
2.4.3 FD 研修	44
2.5 学術教養センター	49
2.5.1 授業評価	49
2.5.2 授業公開	50
2.5.3 FD 研修	52

3. 点検と課題	54
3.1 授業評価	54
3.2 授業公開と研修	55
おわりに	59

1. 活動概要

1.1 委員の構成

チームの規定（規定第 12 号）により教育担当理事をチーム長とし，メンバーを理事が選考する。2011 年度のメンバーは，以下の 13 名の教員と 5 名の職員である。

2011 年度チーム委員名簿

氏 名	所 属	職	役 割
坂 田 幹 男	理事（教育担当）	副 学 長	チーム長
清 水 葉 子	経済学部	准 教 授	委員
境 宏 恵	経済学部	准 教 授	委員（前期）
飛 田 正 之	経済学部	准 教 授	委員（後期）
加 藤 久 晴	生物資源学部	准 教 授	チームリーダー
黒 川 洋 一	生物資源学部	講 師	委員
加 藤 辰 夫	海洋生物資源学部	教 授	委員
水 田 尚 志	海洋生物資源学部	准 教 授	委員
深 沢 裕 子	看護福祉学部	准 教 授	委員
塚 本 利 幸	看護福祉学部	准 教 授	委員
島 田 洋 一	学術教養センター	教 授	委員
山 川 修	学術教養センター	教 授	委員
朝 日 百百代	学術教養センター	教 授	委員
白 崎 雅 義	教育・学生支援部	部 長	事務局
清 川 伸 一	教育推進課	課長代理	事務局
大 野 史 博	情報ネットワーク管理室	室長代理	事務局
遊 津 安 司	企画サービス室（小浜 C）	主 任	事務局（小浜 C）
山 本 紘一郎	教育推進課	主 事	事務局（福井 C）

1.2 会議録

■ 第 1 回会議録

日時 平成 23 年 5 月 27 日（金）14:40～16:30

場所 福井キャンパス管理棟特別会議室，小浜キャンパス TV 会議室

出席 坂田，境，加藤久，黒川，水田，深沢，塚本，山川，朝日，事務局（白崎，清川，大野，遊津，山本）

欠席 清水，加藤辰，島田

1. チームリーダーについて

坂田副学長より，資料に基づいて今年度のチーム員が紹介され，昨年度までチームリー

ダーであった本田教授に代わり、生物資源学部の加藤久晴准教授にチームリーダーをお願いしたいとの意向が示され、承認された。

2. FD事業について

① 2010年度事業のまとめ

資料に基づいて事務局より実施状況と全体の結果について報告された。

委員より下記の意見が出された。

- ・学生による授業評価結果の実施結果について、前期と後期で参加教員数が同じであるに関わらず、割合が異なっているのはどうしてか。
- ・学部には所属している教員数ではなく、授業を担当された教員数で算出していることによる違いであることが事務局から説明された。

② 2011年度事業について

②－1 2011年度 FD実施事業予算について

資料に基づいて、事務局より報告された。

②－2 2011年度授業評価について

(1) 2010年度の問題点と改善意見

坂田副学長より、2010年度のFD報告書の内容をもとに以下の問題提起および提案がなされた。

- ・昨年度の試みとして、授業評価に対する全教員のコメント欄を設け、コメントが行なわれなかった場合にも空欄のままホームページに掲載するというようにしたが、それでもコメントが空欄である先生方が多くいる。「コメントなし」ということであればその旨を伝えてほしいとお願いしていても無視されているのが現状である。
- ・次期中期目標・中期計画策定における重要な取り組みの一つに教員評価があげられ、授業評価を含めた教員評価が第三者に委ねられることにより、厳しい注文がなされる可能性がある。形骸化しつつあるこれまでの取り組みを漫然と行うだけではダメであろう。そのような現状を踏まえ、教員はFD活動をさらにステップアップさせる必要があり、その意思を示すためにも少なくとも授業評価には全教員が参加し、その結果に対するコメントを返す必要があるのではないか。
- ・授業評価の自由記述欄は各学部長が目を通すなど、第三者が必ずチェックし、対処する必要があるのではないか。

委員より下記の意見が出された。

- ・教員評価に導入されるかもしれない成果主義は日本の企業では失敗している。県はその現状をちゃんと考慮した上で教員評価を進めようとしているのか。成果主義を導入した場合、各教員間での協力ができなくなる可能性が高い。
- ・数値だけで授業評価の結果を判断してはいけないのではないか。授業の性質や教室規模によっては内容に関係なく数値が変動すると思われる。
- ・一度、授業公開・授業参観を義務化することを試みてはどうか。
- ・教員の授業に対するモチベーションが下がっていると言われるが、授業参観を義

務づけるという手段で高めることができるのか。

- ・個別教員評価結果を全員「公開」として、年に1～2回授業参観を義務づけると同時にレポートを提出させ、その後で評判を聞くという方法を試したらどうか。
- ・看護学科では看護師になるための（4年間の）学習が実践能力にとってどのような意味があるのか、各科目間の関係がどのように学習効果として上がっているのか、教員がどのようなねらいをもって行っているのかなど、（FDとは関係なく）教員間で勉強会を行うことを企画している。
- ・生物資源学部では、学生からの声に耳を傾けるだけでなく、教員から学生への意見や注文などをまとめる予定である。
- ・看護学科や生物資源学部のような独自の取り組みを自由に発展させていくというアプローチも、大学全体のFD活動として大切だと思われる。

(2) 2010年度の問題点と改善意見

前期授業アンケート実施日程

原則として7月11日（月）～7月22日（金）【補講期間の2週間前】

なお、授業評価の全体集計結果は9月頃になることが報告された。コメント作成依頼については、できるだけ早く依頼することとし、2週間程度の作業時間が必要であることが確認された。

②—3 2011年度授業公開について

(1) 2010年度の問題点と改善意見について

これまでの議論をもとに、坂田副学長から以下の内容を各部局において報告することが依頼された。

- ・昨年のFD活動の反省の結果から、以下のことを教員の義務としたい。ただし、今後も議論が必要。
 - 授業評価に対するコメントを必ず回答する。
 - コメントが無い場合、最低でも「コメント無し」の回答を提出する。
 - 授業評価を行わない場合、その理由をコメント欄に記述する。
- ・報告事項：次期中期目標・中期計画策定において、授業公開、授業参観の実績は今後重要な意味を持つと思われる。授業評価がこのまま形骸化していくようであれば、授業公開・授業参観を義務づけることを検討せざるを得ない。
- ・授業評価の自由記述欄は各学部長が目を通すなど、第三者がチェックするシステムをつくる必要があると考えている。

山川教授より以下の提案があった。

- ・授業公開や授業参観に代わるものとして、各学部の代表教員に、授業スキルを学内の研修会の形で紹介してもらうなどの方法はどうか。各教員の授業改善に役立つのでは。学内のFD研修にもなる。

(2) 2011年度の公開計画

- ・2011年度における各部局の授業公開の方針や研修計画等は、フレックスSNSのFD

委員会のコミュニティサイトに書き込む（アップする）こととした。

②ー4 2011年度FD研修について

(1) 2010年度の問題点と改善意見について

委員より下記の意見が出された。

- ・外部から講師を呼んでの研修は行われなかった。
- ・マンネリ化が進んだためか、年々参加人数も少なくなっている。
- ・我々がどのような努力をし、どのような改善ができたかなどをきちんと示していく必要がある。

(2) 2011年度の研修計画

各部局で計画，立案して報告することとする。

また，山川教授より下記のイベントに関するアナウンスがあった。

○第7回Fレックスシンポジウム

6月3日 13:30～17:30 交流センター3階多目的ホール

福井県内の各高等教育機関の学長・校長，および文科省の官房審議官が参加。

○FD合宿研究会

8月末 会場は県大小浜キャンパスの予定。

FD研修の一環として位置づけたい。

3. 障害学生修学支援グループの設置について

坂田副学長より障害学生修学支援グループの設置について説明があった。

- ・これまで，学術教養センターの清水教授に個別に対応をしていただいていたが，負担が大きい。
- ・日本学生支援機構からの要望もある。
- ・近隣の他大学においては支援体制がすでに整備されている。

上記等の理由により，発達障害の学生に対する修学支援を行うことを検討し，本年度より教育学習支援チームの中に障害学生修学支援グループを設置することとなった。本来は別チームとして設立すべきであるが，広い意味での学生支援に含まれるので，形式上このような位置付けとなった。教育学習支援とは議事内容の関連性はあまりなく，発達障害および身体に障害のある学生を支援していくことが目的である。なお，障害学生修学支援グループのメンバーは教育学習支援チームの会議には参加しないが，一部教育学習支援チームを兼任するメンバーもいる。第1回目のグループ会議は6月3日（金）9時より開催予定。

4. その他

① 教育の情報化に役立つ，Fレックスの機器について

山川教授より，さまざまなFレックス Web サービス（「総合活用ガイド」参照），およびFレックスのSNSおよびLMSのログイン状況に関する説明がなされた。要望があれば講習会を開催することが報告された。

② 次回チーム会議開催予定

第2回会議は10月上旬に開催予定。その間に緊急議題があれば，まずは坂田副学長へ

連絡することが確認された。

■ 第2回会議録

日時 平成23年10月13日（木）13:00～14:30

場所 福井キャンパス管理棟特別会議室，小浜キャンパス TV会議室

出席 坂田，清水，加藤_久，水田，塚本，山川，事務局（白崎，遊津，山本）

欠席 飛田，黒川，加藤_辰，深沢，朝日，島田，事務局（清川，大野）

1. 前期授業評価結果について

事務局より実施状況および結果が説明され，以下の質疑応答があった。

- ・全ての部局において，授業内容の理解に関する項目が一貫して低く推移しているのが気になっている。学生の理解度が低いことを前提にして，講義を工夫する必要があるかもしれない。学生の理解度が年々低くなっているのであれば，どうすれば良いのか検討しなければならない。個人的には「ゆとり教育世代」の学生から低下傾向にあると思うが，その検証は難しい。しかし，このままでは授業内容のレベルと理解度との乖離は解消されないので，各部局で分析や検討を行っていただきたい。
- ・学生生活実態調査の結果を見たことがあるが，今回の結果と同様，学生の理解度が低い傾向にあるようである。学生自身の謙遜もあるのかもしれないが。
- ・前回の会議でもお願いしたが，授業評価アンケートを実施しない場合，不実施理由書を事務局に提出することになっているが，今回も理由書を出さなかった教員が多数おり，自分の担当した全科目について授業評価アンケートを全く実施しなかった教員もいる。失念されていた教員もいるかもしれないが，再度，部局内で周知・徹底をお願いしたい。
- ・前期授業評価結果について，アンケートの自由記述欄に対するコメント作成についても協力をお願いする。コメントがない場合でも「コメントなし」と返事をしてほしい。

2. Fレックス合宿研修会報告（8/26 開催）について

山川教授よりFレックス合宿研修会の実施内容について報告され，本学のFD研修会として，セッション1の講演「専門分野と対話力を考える」を福井キャンパスとテレビ講義で接続して実施したことが説明された。

委員より下記の意見が出された。

- ・福井キャンパスでは参加教員数が3名だったということが残念だか，小浜キャンパスでは常時10名以上の参加があった。
- ・開催時期が夏季休業期間ということを考えると，出席者が少なすぎるのではないか。
- ・開催のアナウンスは全学メールで何回か実施している。
- ・研修会という名目でも人が集まらないという状況は何とかしないといけない。
- ・余談になるが，研修会に来ていただいた天津屋社長の小川氏から，福井商工会議所青年部，福井青年会議所，PTA連合会と共同でキャリア教育のフォーラムを開催しているということを聞いた。企業でも問題意識をかなりもっているようである。F

レックスでもコンタクトをとって、キャリア教育の在り方などを議論していけたらと考えている。その内容を本学にフィードバックできるのではないかな。

3. 障害学生修学支援グループ会議の報告について

坂田副学長より障害学生修学支援グループ会議の議事録（一部抜粋版）について報告された。

委員より下記の意見が出された。

- ・ 初期対応について、学術教養センターの先生方には発達障害を意識していただき、学生の把握をお願いしたいとあるが、正直無理である。専門家でもない教員が判断するのは難しい。個人的な要望としては、専門家集団を組織していただき、そこから連絡があった上で相談できると良い。
 - ・ そういう（障害をもつ学生の把握をして欲しいという）意味ではなく、1 年次必修である導入ゼミの授業等で長期欠席の学生がいた場合に報告してほしい、ということである。
 - ・ 長期欠席の学生については以前から報告しているが、1 回や 2 回の欠席者について、単なるサボりなのか、発達障害を抱えているがために出席できないのかの判断が教員はできない。例えば、担任制というものが各学部にあるので、学生に関して気になる点があれば情報を蓄積していける学生カルテのような場所（紙ではなく Web 上）があると、複数の教員からの情報をもとに専門家や担任教員が早期に発見できるのではないだろうか。
- すぐにやってほしいと言っているわけではなく、1 つのアイデアとして述べている。集められた情報は、障害を持つ学生だけでなく、学生をサポートするという面で就職支援にも生きてくるのではないかな。
- ・ 障害学生修学支援グループ内でも、各部局のグループメンバーに情報提供を呼びかけようという動きはあり、情報が蓄積した段階で専門家である清水教授に相談するイメージはもっているが、Web 上やカルテというまでは至っていなかった。
 - ・ 確かに、判断するための線引きが非常に難しいというご意見は間違いないが、目的は早期対応を心がけたいというものである。海洋生物資源学部は 1 学年あたり 40～50 名ということで、教員側も学生の名前と顔が一致しているかと思うが、経済学部では 1 学年で両学科合わせて 200 名近くもいるので、把握しきれないのが実情である。そのため、1 年次の導入ゼミにおいて学術教養センターの協力をお願いしたいというのが主旨である。

4. 平成 22 年度業務実績評価書について

資料に基づいて坂田副学長から、平成 22 年度業務実績評価書について説明がされた。

委員より下記の意見が出された。

- ・ 昨日の教授会で議論したが、既に実施済みの内容について指摘を受けている。評価委員の方は本学の実情を理解しているのか、という意見が出された。特記事項に記載があることは本学ホームページを見れば、報告書として FD の全てが掲載されている。

- ・評価委員の方に本学ホームページに既に掲載してあることを把握した上での質問なのか確認してみる。
- ・「講義後アンケートを実施して学生の受け入れ方を調査した方が良い」という部分の意味がよく分からない。
- ・恐らく、講義内容に関する学生の「受け止め方」を調査したほうが良いという意味合いで記載されていると思われる。
- ・そういう意味合いであれば、授業評価アンケートに質問項目を追加すれば解決できる。
- ・現在の授業評価アンケートでは、自由記述欄において「授業内容がシラバスと即していたか」を既に質問している。
- ・「講義後」という意味が毎回の授業後のことなのか、半期の授業の終わりなのかを確認してみる。

5. 次期中期計画における FD 活動について

資料に基づいて坂田副学長から、次期中期計画における FD 活動について、この素案は、各学部から意見があり、それを整理したものであることが説明された。

委員より下記の意見が出された。

- ・本学の FD 活動はマンネリ化傾向にあり、ステップアップの時期にあると考えている。福井大学の副学長と話す機会があり、福井大学では学生の授業評価に対して必ずコメントを書き、教員が何を改善したか、これからどういう方向性にしていくかを様式に記入させるということを義務化しているらしい。また、それとは別に、学生に **Best teacher of the year** を投票してもらい、検証する制度があるとも伺った。
- ・全国的に教員別個別集計結果も公表する流れにあるようだ。授業評価アンケートの自由記述欄についても、本人以外の第三者が閲覧することで、学生の意見を漏れなく吸い上げることができるのではないかと考えている。本人しか見ることができないというのは限界にきている。
- ・大学が仮想する中期目標と中期計画とを明確に区別して示していただいた方が検討しやすい。
- ・今月末に県から中期目標（素案）が提出されると聞いている。その後、中期計画作成のためのワーキンググループが結成されることになっている。
- ・来年3月に中期目標（素案）を知事に報告とのことであるが、次回（第3回）教育学習支援チーム会議は来年3月中旬に開催予定である。それまでに、教育学習支援チーム会議として中期計画作成のために何かやることはあるのか。
- ・FD に関する事項については、この会議で意見を集約して作成しなければならないと考えている。メーリングリスト等でいろいろな意見を聞くこともあるだろう。

6. F レックス学生アンケートの実施について

資料に基づいて山川教授から、F レックス学生アンケートの実施について説明がされた。

委員より下記の意見が出された。

- ・1年生に関しては情報系の必修授業でお願いできるが、2～4年生については各学部を

通じて学生にお願いしてもらうしか方法がないので、ゼミや実験の授業等で呼びかけていただき、学生からの回答にご協力いただきたい。

- ・全国的に統一フォーマットを用意して実施しようという動きがあるようで、ある大学では、このアンケート結果を利用して FD 活動に役立てているらしい。教員側が抱いている学生のタイプと結果が全く違っていたということで新たな発見につながっている。そういう意味では、FD 活動の見直しを検討する契機になるかもしれない。
- ・回答時間は 10～15 分程度かかると説明していただければ十分だと思う。
- ・今回は無記名での実施だが、記名式にすると、年次を追って自分の学生タイプや学習タイプがどう変化しているのかをトレースできるので有意義だと考えている。今後、記名式で実施しても構わないということであれば、その準備はしていきたい。
- ・記名式で実施する場合、個人の回答内容については外部に漏らさないという条件は当然必要である。
- ・F レックスの e ポートフォリオを利用して、アンケート結果を個人にフィードバックすることが可能。他人が見ることはできないし、1～4 年生までの蓄積もできる。
- ・来年度以降は記名式で実施した方がメリットが多いのではないか。
- ・F レックスで実施するため、統計的には他大学との比較もできるが、この大学はこういうタイプが多いという議論はできない。自分の大学のデータ以外は公表してほしくないという要望が多い。
- ・最終的には、各学部・各学年ごとアンケート結果をフィードバックさせていただく。

7. 後期授業評価日程について

平成 24 年 1 月 12 日（木）から 1 月 25 日（水）

8. 次回チーム会議開催予定

第 3 回会議は 3 月中旬に開催予定であるが、次期中期計画の作成のため緊急を要する議題があれば、随時開催する可能性があることが確認された。

■ 第 3 回会議録

日時 平成 24 年 3 月 22 日（木）13:00-14:10

場所 福井キャンパス管理棟特別会議室、小浜キャンパス TV 会議室

出席 坂田、清水、加藤_久、黒川、加藤_辰、水田、深沢、塚本、朝日、山川、事務局（白崎、清川、遊津、山本）

欠席 飛田、島田、事務局（大野）

1. 2011 年度 FD 事業報告について

① 授業評価結果について

事務局より実施状況および結果が説明され、委員より下記の意見が出された。

- ・海洋生物資源学部では、前期の評価結果を踏まえ、11 月に学部内で検討会を開催した。重要項目の経年特性グラフからは、何が原因なのかまでは特定できず、母集団も異なることから単純比較できないという意見がでた。ただ、いずれの項目も低下傾向である

ことには変わらないため、今後も原因究明をしていくつもりである。

- ・アンケートの自由記述欄はチェックされているか.ここに重要なポイントが隠されていると思う.
- ・当然、各教員にはアンケートが渡っているので、自由記述欄に目を通して思うが、検討会では教員から特に意見は出なかった.コメントにはいろんな種類があり、信頼性を疑うような内容もある.どれが正しいのかという判断が難しい.
- ・グラフが山あり谷ありと変動している場合、統計的な誤差の範囲であるという捉え方ができるが、海洋生物資源学部のグラフは明らかな傾向があるので、原因究明した方が望ましいと思う.
- ・原因が何か、と言われると学部化によって定員数が増加したことや、ゆとり教育による理解力の低下ということが考えられる.
- ・学部化による定員増は海洋生物資源学部の特徴ではあるが、ゆとり教育が原因であるならば、他の部局も同じ傾向が現れないとおかしい.
- ・看護福祉学部でも、詳細な分析をしたいが現在の情報だけでは難しいと考えている.学年ごとのデータはないかという意見もある.授業内容の理解という項目がここ2年続けて低下しているが、看護福祉学部は実習があり、学生の能力を直接現場で確認することができる.そういう中での実感として、学生の質の低下を感じている教員がいるのも確かである.
- ・生物資源学部では、教員にアンケートをお願いして、どのような授業改善に取り組んでいるかを検討した.学生の理解度を把握するために、小テストを行ったり、学生に興味を持ってもらうために授業外的话题を展開したり、様々な工夫をしている教員がいる.その影響もあってか、生物資源学部の授業方法の項目の値が昨年度より上昇している.まず、現状把握に努めるということから始めた.
- ・経済学部でも理解力が低いという傾向が継続しているが、他の教員に相談しても原因究明にはデータ不足であると感じているようである.評価の低い科目が大教室の授業なのか、それとも少人数の授業なのか、理論系の授業なのか、政策的な授業なのかを把握できれば、改善の糸口になると思う.全体像だけを見ても何とも言えないのが正直なところである.それを事務局にお願いするのは難しいと思うが、もう少し詳しい情報がほしい.
- ・教員別個別評価結果を分析すれば、どの科目で評価が高い、低いというのは把握できるが、その情報を委員の先生方に提供してもよいかというのを部局内で検討していただかないといけない.教員名を削除したとしても、科目名から担当教員がすぐに分かってしまう.
- ・特定の科目を合算したデータで集計してほしいとお願いした場合、事務局の負担になるか.
- ・事務局でデータを解析しているわけではないので、対応するのは難しい.
- ・全教員に公開するわけではないので、部局内で検討して承諾が得られれば、事務局からデータをもって自由に分析するのが望ましいだろう.

- ・自由記述欄を充実させるためには、記名式にするとか、回答方法を工夫する必要があるのではないか。福井大学や福井高専では記名式あるいは学籍番号記入式にしていると聞いている。
- ・学生が適当にコメントしているのを読むと、教員側も真剣に回答する気がなくなる。
- ・記名式のアンケートにしたとき、教員の成績評価を気にして、素直に記入できなくなる可能性は考えられないか。
- ・現在の流れでは、補講期間の1週間前にアンケートを実施し、データ集計後、教員の手元にアンケートが戻ってくるのは学生の成績がついた後である。この事実を学生にしっかり周知することが重要だと思う。
- ・アンケートと自由記述欄を切り離して、自由記述欄にだけ記名式にする方法はどうか。
- ・それより、アンケート冒頭に記名させて、教員にアンケートを返却する際、記名部分を切り離してしまうという方法もある。自由記述欄を読むのに、誰が書いたかという情報は必要ない。
- ・記名されていないとコメントしたくない、という教員がいるのも確かである。
- ・個人的に『誰が書いたか』というより、自分の授業に対して『どういう意見があるか』ということの方が有用だと考えている。ただし、プレーキの役目として記名式にするという考えも一理ある。
- ・アンケートを実施するタイミングも重要であると思う。授業の冒頭だと遅刻者が回答できず、授業の最後だと早く帰りたい学生は適当に記入するという問題がある。
- ・自由記述欄はポジティブな意見とネガティブな意見の両方がほしい。

② 後期各部局のFD活動について

経済学部

○授業公開について

後期に2科目予定していたが、教員の都合により1科目のみの実施となった。参加教員から意見をいただいている。

○FD研修について

外書講読担当者懇談会を開催し、各担当教員の授業に対する考え方や現状について有益な意見交換ができた。

生物資源学部

○授業公開について

今年度は3科目について授業公開を行い、学生の現状を見ていただき、気づいた点があれば意見交換会を開催して対応を検討した。

まとめとして、懇談会等を通じて教員間の情報共有を図っており、どのように授業改善をしていけばよいのかというノウハウについても検討を重ねている。

○FD研修について

懇談会「授業改善の取り組みに関する情報収集と意見交換会」を実施した。前期に各教員から聞き取りを行い、まとめたものを懇談会で報告した。学生の理解を確認

する工夫をしている教員や学生の抱える問題を把握し、改善に努めた教員もいた。また、積極的に学ぼうとしない「学ぶ意欲の低さ」が認められた。まとめとして、理解力の低下は、ゆとり教育で基礎学力がついていない学生がいることにも関連すると考えており、教員側がいかなる工夫を行っても、学習意欲を見せない学生に対する、即効性のある効果を期待するのが難しいという課題も浮き彫りになった。

海洋生物資源学部

○授業公開について

後期に1科目、授業公開を実施した。参観数は5名で意見交換を行った。

○FD研修について

8月に実施されたFD合宿研修会に小浜キャンパスの教員15名が参加した。小浜の教員の6割が参加したことになる。

看護福祉学部

看護学科

○授業公開について

随時公開という形式で実施したが、結果として参加者がいなかった。実習で学外にすることが多いため、時間が合わず、参加できなかった教員もいる。ただ、実習現場において、学生の反応を実際に目の当たりにできるので、部局の特徴を活かしたFD活動を展開していきたいと考えている。

○FD研修について

学科全体を対象としたFD研修は実施できなかったが、個人的に3月上旬に開催されたFDフォーラム（主催：大学コンソーシアム京都）に参加した。スタイルが異なる3人の教員から話を聞くことができ、自分の授業にも活かせると考えている。

社会福祉学科

○授業公開について

前期1科目、後期3科目について授業公開を実施し、随時公開ではあったが参加教員はいなかった。実習で教員が忙しいというのが大きな理由であると考えている。

○FD研修について

厚生労働省の指導により、カリキュラム改正が頻繁にあるため、社会福祉学科のカリキュラムの在り方と人材育成についてFD研修を実施した。

関連して、精神保健福祉士や社会福祉士のカリキュラム改正が今後予定されており、それに対応するため、授業の組換えを行っているので、学科全体として効果的なチェックができていると思う。

また、長期的に分析してみないと分からないが、国家試験の合格率という点では、低下傾向は見られず、全国でも上位をキープしている。

学術教養センター

○授業公開について

この4年間随時公開とし、担当教員に事前連絡のうえ参観することを原則としている。後期も学術教養センターの方針で随時公開という形で授業公開を進め、自主的

な授業公開の経過を観察したが、特別にスケジュールを組んだ積極的な公開授業はなかった。一般教育は大人数講義が多いこと、必修科目や選択必修科目を含むことを考えると、ここ5年間の「総合」、「関心」および「内容理解」は安定して3.1～3.4を維持しており、高評価と言えるが、特に大講義室授業の創意・工夫による授業評価の向上を図ることを心がけることが一般教育科目の今後の課題であると考えている。

前期に開講された「日本の文化と社会」は、オムニバス形式で、学術教養センター教員12名が関わる授業である。オムニバス形式で初めて開催された22年度においては、担当教員の多くが、自分の担当時間以外にも授業に出席し、「自然な授業公開」が実現していたのだが、今年度はほとんどの教員が連続して担当していたせいなのか、自分の担当時間以外に授業に出席する教員がほとんど見られなかったというコメントもあった。今年度の実態を踏まえた上で、次年度にむけた方策として、1) このままで経過を観察するか、2) これまで参加・公開したことのない人は、来年度に参加 and/or 公開をするか、のいずれかで検討する予定である。

○FD研修について

8月に開催されたFD合宿研修会に山川教授が参加し、報告書を提出してもらっている。

③ 決算報告について

2011年度のFD事業経理の大項目と細目、およびその実績を示す。

今年度は、教育学習支援チーム内に障害学生修学支援グループが発足したことにより、グループの活動費についてもFD事業予算を使用している点が例年と大きく異なっていることが報告された。今年度はFD合宿研修会や障害学生修学支援研修会等が開催されたことにより、報酬費や旅費が大幅に増加し、全体として161,355円の増となった。来年度以降のFD予算事業費について、今年度と同額を要求しているが、FD活動の強化や障害学生修学支援グループの活動強化のため、予算が必要となる場合には、今後予算枠の拡大や組換えについて事務局内で交渉することが確認された。

④ 「ファカルティ・ディペロップメント報告書2011」の作成について

報告書の内容について、掲載内容の確認がされた。昨年度と異なる内容を掲載するにあたり、みだしの変更が必要な場合は事務局に連絡するようお願いがされた。

校正等はメーリングリストを使いながら行い、原稿締切は今年度末(3月30日)とすることが確認された。

2. 障害学生修学支援グループの活動について

事務局より障害学生修学支援グループの活動について報告された。グループ会議を3回開催し、学内支援対策の構築に関することや個別案件を中心に修学上の問題・課題に関すること、就職支援に関することについて議論があった。

学外視察と学内研修について、富山大学が障害学生の修学支援体制を構築しており、先

進事例校でもあるため、教職員 6 名で視察に伺い、先方からも講師を招いて研修会を開催したことが報告された。富山大学においても、組織体制を構築してから全学的な協力が得られるまでに 3 年を要したということであり、本学はグループという位置付けで発足したため、体制を強化していく中で修学支援の対応を検討していくことになるだろうという報告がされた。

学外研修等について、発達障害を中心に、身体障害も含め、グループの教員には事例研究会に参加していただいたことが報告された。

3. F レックス学生アンケートの実施について

資料に基づいて山川教授から、F レックス学生アンケートの結果について説明がされた。今年度は仁愛女子短大、敦賀短大、県立大学の 3 校で実施したことが報告された。

委員より下記の意見が出された。

- ・今回は無記名であったが、次回以降は記名式にすることにより、学生にフィードバックができ、キャリア教育と連携した実施が可能になると考えている。
- ・いろいろなクロス分析が可能なので、質問項目に目を通していただき、分析について要望があれば連絡してほしい。
- ・タイプ別の学生と将来の見通しの有無に関する分析では、部局で顕著な差が現れている。
- ・回収率が低い原因として、ネットからの回答を学生に要求したためであると考えている。できれば、紙媒体でアンケートを実施して、データをエクセルに落とし込みたい。そこからは教員の方で解析が可能なので、そこまでの費用を捻出してもらえないか。
- ・アンケートを記名式で実施したいので、来年度の早い時期に結論を出していただきたい。
- ・来年度は仁愛大学、福井工業大学、福井高等専門学校も参加予定であるため、6 校で実施可能だと思われる。データも増えるので、もう少し正確な結果が得られるだろう。
- ・授業評価アンケートの結果分析において、全体評価からは詳細な分析ができないということであったが、この学生アンケート結果を組み合わせれば、学生の実態からアプローチした違った分析が可能ではないかと思う。

4. その他

後期授業評価アンケートに対するコメント作成のお願いについて

年度末までに各教員に後期授業評価結果とアンケート原本を送付することが報告され、コメントについては 4 月中旬までに各学部担当者に提出するようお願いがされた。

1.3 FD 事業経費

今年度は、教育学習支援チーム内に障害学生修学支援グループが発足したことにより、グループの活動費についても FD 事業予算を使用している点が例年と大きく異なっている。今年度は FD 合宿研修会や障害学生修学支援研修会等が開催されたことにより、報酬費や旅費

が大幅に増加し、全体として 161,355 円の増となった。

平成23年度 FD事業経費(実績)

(単位:円)

費目	項目	細目	実績
旅費			78,800
	招聘	FD研修 講師報酬(F-レックス合宿研修会)(8/26～27)	19,200
	招聘	FD研修 講師報酬(F-レックス合宿研修会)(8/26～27)	19,200
	招聘	FD研修 講師報酬(社会福祉学科開催)(11/1)	21,200
	招聘	障害学生修学支援研修会 講師報酬	19,200
旅費			309,516
	派遣	FD研修(F-レックス合宿研修会)(8/26～27)	23,412
	派遣	FD研修(F-レックス合宿研修会)(8/26～27)	21,430
	派遣	FD研修(F-レックス合宿研修会)(8/26～27)	23,412
	派遣	FD研修 講師旅費(F-レックス合宿研修会)(8/26～27)	20,760
	派遣	FD研修 講師旅費(F-レックス合宿研修会)(8/26～27)	8,760
	派遣	FD研修 講師旅費(社会福祉学科開催)(11/1)	40,680
	派遣	FDフォーラム参加費用(旅費＋参加費用)	31,580
	派遣	FDフォーラム参加費用(旅費＋参加費用)	15,720
	派遣	障害学生修学支援研修会 講師旅費	9,400
	派遣	障害学生修学支援事例研究会(日本学生支援機構主催)(9/1～2)	39,920
	派遣	障害学生修学支援体制視察(富山大学)(10/24)	10,022
	派遣	障害学生修学支援体制視察(富山大学)(10/24)	10,022
	派遣	障害学生修学支援体制視察(富山大学)(10/24)	9,400
	派遣	障害学生修学支援体制視察(富山大学)(10/24)	11,610
	派遣	障害学生修学支援体制視察(富山大学)(10/24)	11,898
	派遣	障害学生修学支援体制視察(富山大学)(10/24)	12,090
	派遣	障害学生修学支援地域連携シンポジウム(12/16)	9,400
消耗品費			20,721
		FD研修資料代(F-レックス合宿研修会)(8/26～27)	3,000
		FD研修資料代(F-レックス合宿研修会)(8/26～27)	3,000
		お土産(五月ヶ瀬)	1,890
		参考図書(大学生の発達障害)	12,831
委託料			2,055,900
		前期授業評価アンケート業務委託	955,500
		後期授業評価アンケート業務委託	924,000
		FD報告書2010 印刷	176,400
合計			2,464,937

1.4 事業の実施状況

1.4.1 授業評価

実施概要、質問用紙と回答用紙、全体集計結果を 15 頁より順に掲載する。15 頁の実施概要を 2010 年度のそれと比較すると、前期の学部に参加科目が 318 科目から 321 科目に増加（内訳は経済学部 5 科目減、生物資源学部 1 科目減、海洋資源学部 5 科目減、看護福祉学部 5 科目増、学術教養センター 8 科目増、キャリア教育科目 1 科目増）し、後期は 295 科目から 307 科目に増加（内訳は経済学部 26 科目減、生物資源学部 6 科目減、海洋資源学部 13 科目増、看護福祉学部 3 科目減、学術教養センター 33 科目増、キャリア教育科目 1 科目増）した。

平成23年度前期 学生による授業評価の実施結果

★実施期間

平成23年7月11日(月)～7月22日(金)

★調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	2,205 枚	5,613 枚
生物資源学部	736 枚	996 枚
海洋生物資源学部	844 枚	1,217 枚
看護福祉学部	1,721 枚	2,237 枚
学術教養センター	4,415 枚	7,681 枚
キャリアセンター	19 枚	枚
計	9,940 枚	17,744 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	69 枚	95 枚
生物資源学研究科	40 枚	92 枚
看護福祉学研究科	24 枚	27 枚
計	133 枚	214 枚

★参加教員

＜学部＞		
経済学部	29 人	93.5%
生物資源学部	13 人	92.9%
海洋生物資源学部	16 人	100.0%
看護福祉学部	30 人	93.8%
学術教養センター	28 人	100.0%
キャリアセンター	1 人	100.0%
非常勤講師	43 人	87.8%
計	160 人	93.6%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	10 人	83.3%
生物資源学研究科	3 人	37.5%
看護福祉学研究科	10 人	76.9%
非常勤講師	3 人	50.0%
計	26 人	64.1%

★参加科目

＜学部＞		
経済学部	52 科目	86.7%
生物資源学部	22 科目	100.0%
海洋生物資源学部	25 科目	96.2%
看護福祉学部	49 科目	86.0%
学術教養センター	172 科目	87.3%
キャリア教育科目	1 科目	100.0%
計	321 科目	88.4%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	12 科目	70.6%
生物資源学研究科	3 科目	33.3%
看護福祉学研究科	15 科目	78.9%
計	30 科目	66.7%

平成23年度後期 学生による授業評価の実施結果

★実施期間

平成24年1月12日(木)～1月25日(水)

★調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	1,368 枚	4,557 枚
生物資源学部	640 枚	976 枚
海洋生物資源学部	624 枚	1,030 枚
看護福祉学部	1,581 枚	2,209 枚
学術教養センター	3,676 枚	8,157 枚
キャリアセンター	10 枚	18 枚
計	7,899 枚	16,947 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	63 枚	93 枚
生物資源学研究科	29 枚	50 枚
看護福祉学研究科	20 枚	28 枚
計	112 枚	171 枚

★参加教員

＜学部＞		
経済学部	26 人	86.7%
生物資源学部	13 人	86.7%
海洋生物資源学部	15 人	88.2%
看護福祉学部	24 人	92.3%
学術教養センター	25 人	96.2%
キャリアセンター	1 人	100.0%
非常勤講師	40 人	87.0%
計	144 人	89.4%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	12 人	70.6%
生物資源学研究科	4 人	100.0%
看護福祉学研究科	6 人	66.7%
非常勤講師	4 人	50.0%
計	26 人	68.4%

★参加科目

＜学部＞		
経済学部	50 科目	83.3%
生物資源学部	22 科目	84.6%
海洋生物資源学部	26 科目	74.3%
看護福祉学部	49 科目	71.0%
学術教養センター	159 科目	87.4%
キャリア教育科目	1 科目	100.0%
計	307 科目	82.3%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	16 科目	69.6%
生物資源学研究科	5 科目	71.4%
看護福祉学研究科	9 科目	69.2%
計	30 科目	69.8%



福井県立大学 授業に関する調査

質問および回答用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために
行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

回答は裏面の回答欄に記入してください。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号をマーク、記述
してください。

記入上の注意

- 1: 選択回答の場合はマークシート記入を、記述回答の場合は対応する空欄に記述
してください。
- 2: 記入は濃い(B程度)鉛筆またはシャープペンシルで強く書いてください。
- 3: 訂正する場合は、プラスチック消しゴムで完全に消してください。
- 4: 用紙は、コンピュータ処理しますので、折り曲げたり汚したりしないでください。

マーク例) 良い例 (2) ...  悪い例 (2) ...    



本アンケートによる(全学、学部別等)授業評価結果は、本学
ホームページ上で今学期末に開示予定です。

過去の集計結果は <http://www.s.fpu.ac.jp/FD/lecinq.html>
をご覧ください。

学籍番号の上から1ケタ目の数字をマークしてください。

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

例) 平成21年4月入学生・・・①

学籍番号の上から2ケタ目の数字をマークしてください。

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

例) 平成21年4月入学生・・・①

学部生 所属の番号をマークしてください。

1: 経済学部経済学科 2: 経済学部経営学科 3: 生物資源学部生物資源学科 4: 海洋生物資源学部海洋生物資源学科
5: 看護福祉学部看護学科 6: 看護福祉学部社会福祉学科 7: 科目等履修生・聴講生

0

1

2

3

4

5

6

7

大学院生 所属の番号をマークしてください。

8: 経済・経営学研究科 地域・国際経済専攻 9: 経済・経営学研究科 経営学専攻 10: 生物資源学研究科 生物資源学専攻
11: 海洋生物資源学研究科 海洋生物資源学専攻 12: 看護福祉学研究科 看護学専攻 13: 看護福祉学研究科 社会福祉学専攻 14: 科目等履修生・聴講生

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

質問および回答欄

Q1 この授業(課題、レポート、予習復習を含む)に意欲的に取り組みましたか?

①意欲的に取り組まなかった ②あまり意欲的に取り組まなかった ③ある程度意欲的に取り組んだ ④意欲的に取り組んだ

0

1

2

3

4

Q2 先生の講義の方法(話し方、板書、プロジェクターの使用、学習支援システム等の活用)はどうでしたか?

①不適切 ②やや不適切 ③まずまず適切 ④適切

0

1

2

3

4

Q3 授業中の内容はどの程度理解できましたか?

①理解できなかった ②あまり理解できなかった ③ある程度理解できた ④理解できた

0

1

2

3

4

Q4 この授業の分野への関心は高まりましたか?

①高まらなかった ②あまり高まらなかった ③少し高まった ④高まった

0

1

2

3

4

Q5 この授業を総合的に評価してください。

①良くない ②あまり良くない ③まずまず良い ④良い

0

1

2

3

4

Q6 授業を受けた上での感想(先生の授業への熱意、方法、教材、授業内容はシラバスに即していたか、教室環境など)を良かった点あるいは不備な点について自由に書いてください。

Q6の自由記述欄

Q7 教員設定の質問 (別紙参照)

0

1

2

3

4

Q8 教員設定の質問 (別紙参照)

Q8の自由記述欄

ご協力ありがとうございました

全体集計結果の見方

次頁より授業評価の集計結果を学部（前期・後期）、大学院（前期・後期）の順に掲載する。以下に、集計結果の見方を記す。

全集計数	回答された全てのアンケートから学部・学科・入学年度が不明のデータを除いたもの
Q1 から Q5	アンケートの Q1 から Q5 に対応 設問のキーワードを記すが、詳細は 17 頁を参照
数値上段	平均値（質問は、4 件法）
数値下段	母標準偏差。数値が大きい場合、平均値周りに正規分布状にばらつきが大きい時もあるが、良い評価と悪い評価が 2 分されている場合もあるので要注意。
集計方法	設問は、回答選択肢「1, 2, 3, 4」をそれぞれ「1 点, 2 点, 3 点, 4 点」と得点化、設問に対して無回答の場合は得点化せず、かつ有効回答数としては計上していない。この得点化規則に則り、設問別、集計グループ別に合計得点を求めて、有効回答数で割った平均値を上段に、母標準偏差を下段に示す。無回答の場合の人数は母集団に含めず、「—」の欄は有効回答が無かったことを示す。

[集計グループ]

全体	全ての集計対象者
学部学科別	当該学部または学科の学生の評価結果を集計
入学年次別	学部学科の枠を越え、学生の入学年次（西暦年の下 2 桁）別に集計
部局別	当該学部には所属する教員が提供する科目に対する評価結果を集計
規模別	授業が行われた教室の大小別に集計

全体集計結果（学部・前期）

集計グループ（集計数）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体（9409）	3.18 0.72	3.22 0.73	3.04 0.73	3.11 0.80	3.26 0.71
学部学科別（9409）					
経済学部（4300）	3.16 0.75	3.22 0.76	3.04 0.77	3.09 0.82	3.25 0.74
経済学科（2259）	3.13 0.78	3.23 0.77	3.05 0.80	3.06 0.85	3.25 0.77
経営学科（2041）	3.19 0.71	3.22 0.74	3.03 0.73	3.13 0.79	3.25 0.72
生物資源学部（1223）	3.10 0.71	3.20 0.72	2.97 0.70	3.08 0.76	3.24 0.68
生物資源学科（1223）	3.10 0.71	3.20 0.72	2.97 0.70	3.08 0.76	3.24 0.68
海洋生物資源学部（1370）	3.15 0.71	3.16 0.70	3.00 0.70	3.03 0.81	3.20 0.68
海洋生物資源学科（1370）	3.15 0.71	3.16 0.70	3.00 0.70	3.03 0.81	3.20 0.68
看護福祉学部（2510）	3.25 0.69	3.26 0.71	3.10 0.70	3.20 0.77	3.31 0.68
看護学科（1738）	3.28 0.67	3.24 0.72	3.12 0.68	3.21 0.77	3.29 0.67
社会福祉学科（772）	3.20 0.73	3.32 0.69	3.07 0.73	3.18 0.79	3.34 0.70
科目等履修生・聴講生（6）	2.50 0.96	2.83 0.90	3.00 0.82	3.17 0.90	3.50 0.50
入学年次別（9409）					
03生（16）	3.13 0.33	3.25 0.43	3.06 0.24	3.13 0.33	3.25 0.43
04生（3）	3.00 0.00	3.00 0.00	3.00 0.00	3.00 0.00	3.00 0.00
05生（7）	3.29 0.45	3.29 0.70	3.29 0.70	3.29 0.70	3.71 0.45
06生（21）	3.29 0.82	3.76 0.43	3.33 0.56	3.57 0.49	3.71 0.55
07生（72）	3.25 0.74	3.47 0.69	3.18 0.63	3.31 0.72	3.57 0.64
08生（426）	3.37 0.69	3.39 0.69	3.31 0.67	3.33 0.78	3.45 0.65
09生（1943）	3.14 0.73	3.20 0.70	3.04 0.71	3.12 0.79	3.24 0.68
10生（2625）	3.16 0.71	3.23 0.72	3.05 0.72	3.13 0.78	3.26 0.70
11生（4296）	3.18 0.73	3.21 0.76	3.01 0.76	3.07 0.82	3.23 0.74
部局別（9409）					
経済学部（2097）	3.11 0.76	3.15 0.78	2.95 0.79	3.04 0.84	3.18 0.76
生物資源学部（695）	3.02 0.68	3.19 0.68	2.93 0.66	3.08 0.70	3.24 0.65
海洋生物資源学部（819）	3.15 0.67	3.12 0.66	2.97 0.68	3.03 0.78	3.19 0.64
看護福祉学部（1625）	3.26 0.68	3.28 0.68	3.11 0.67	3.25 0.75	3.31 0.66
学術教養センター（4154）	3.20 0.73	3.26 0.75	3.10 0.74	3.11 0.81	3.28 0.73
キャリアセンター（19）	3.42 0.67	3.63 0.58	3.47 0.50	3.74 0.44	3.74 0.55
規模別（9409）					
100人以上（4749）	3.11 0.75	3.16 0.76	2.96 0.76	3.06 0.83	3.19 0.74
100人未満（4660）	3.24 0.69	3.29 0.70	3.13 0.70	3.17 0.77	3.33 0.68

全体集計結果（学部・後期）

集計グループ（集計数）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体（7327）	3.18 0.71	3.29 0.70	3.09 0.71	3.19 0.75	3.32 0.67
学部学科別（7327）					
経済学部（3039）	3.15 0.74	3.29 0.70	3.07 0.73	3.17 0.76	3.33 0.68
経済学科（1553）	3.12 0.75	3.30 0.71	3.05 0.75	3.14 0.79	3.31 0.70
経営学科（1486）	3.19 0.72	3.28 0.69	3.09 0.71	3.19 0.74	3.34 0.66
生物資源学部（930）	3.13 0.68	3.26 0.68	3.05 0.68	3.16 0.72	3.32 0.65
生物資源学科（930）	3.13 0.68	3.26 0.68	3.05 0.68	3.16 0.72	3.32 0.65
海洋生物資源学部（1095）	3.07 0.73	3.13 0.73	2.92 0.76	3.03 0.80	3.15 0.71
海洋生物資源学科（1095）	3.07 0.73	3.13 0.73	2.92 0.76	3.03 0.80	3.15 0.71
看護福祉学部（2252）	3.30 0.65	3.36 0.68	3.20 0.65	3.32 0.68	3.40 0.63
看護学科（1651）	3.33 0.63	3.35 0.68	3.23 0.64	3.34 0.67	3.40 0.63
社会福祉学科（601）	3.19 0.69	3.37 0.67	3.12 0.66	3.26 0.70	3.41 0.63
科目等履修生・聴講生（11）	3.36 0.48	3.73 0.45	3.27 0.62	3.45 0.66	3.55 0.66
入学年次別（7327）					
03生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
04生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
05生（5）	2.80 0.40	3.60 0.49	3.80 0.40	3.60 0.49	3.80 0.40
06生（9）	3.11 0.87	3.22 1.13	2.56 0.68	3.78 0.63	3.33 0.82
07生（27）	3.04 0.58	3.26 0.70	3.15 0.70	3.26 0.80	3.26 0.84
08生（250）	3.39 0.73	3.53 0.64	3.35 0.68	3.44 0.67	3.57 0.59
09生（967）	3.29 0.69	3.41 0.62	3.17 0.64	3.32 0.67	3.44 0.59
10生（2270）	3.15 0.68	3.23 0.70	3.05 0.69	3.14 0.76	3.27 0.67
11生（3799）	3.16 0.72	3.27 0.71	3.07 0.73	3.17 0.75	3.30 0.68
部局別（7327）					
経済学部（1258）	3.15 0.72	3.31 0.68	3.04 0.71	3.16 0.76	3.34 0.67
生物資源学部（574）	3.18 0.63	3.28 0.66	3.06 0.65	3.20 0.71	3.34 0.63
海洋生物資源学部（582）	3.00 0.73	3.07 0.74	2.83 0.74	2.98 0.80	3.07 0.72
看護福祉学部（1481）	3.31 0.65	3.35 0.70	3.20 0.64	3.34 0.68	3.39 0.65
学術教養センター（3423）	3.17 0.73	3.28 0.70	3.10 0.73	3.17 0.75	3.33 0.67
キャリアセンター（9）	3.67 0.47	3.78 0.42	3.67 0.47	3.78 0.42	3.89 0.31
規模別（7327）					
100人以上（4247）	3.10 0.72	3.22 0.72	3.01 0.72	3.11 0.76	3.25 0.69
100人未満（3080）	3.30 0.68	3.37 0.66	3.19 0.68	3.30 0.72	3.43 0.63

全体集計結果（大学院・前期）

集計グループ（集計数）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体（111）	3.53 0.61	3.73 0.50	3.50 0.53	3.64 0.58	3.79 0.71
研究科専攻別（111）					
経済・経営学研究科（59）	3.51 0.62	3.69 0.56	3.59 0.49	3.61 0.52	3.76 0.43
地域・国際経済政策専攻（22）	3.45 0.50	3.68 0.63	3.64 0.48	3.59 0.49	3.77 0.42
経営学専攻（37）	3.54 0.68	3.70 0.51	3.57 0.50	3.62 0.54	3.76 0.43
生物資源学研究科（26）	3.50 0.50	3.62 0.49	3.23 0.58	3.62 0.56	3.77 0.42
生物資源学専攻（26）	3.50 0.50	3.62 0.49	3.23 0.58	3.62 0.56	3.77 0.42
海洋生物資源学研究科（9）	3.44 0.96	3.89 0.31	3.33 0.47	3.33 1.05	3.78 0.42
海洋生物資源学専攻（9）	3.44 0.96	3.89 0.31	3.33 0.47	3.33 1.05	3.78 0.42
看護福祉学研究科（17）	3.71 0.46	3.94 0.24	3.71 0.46	3.94 0.24	3.94 0.24
看護学専攻（10）	3.60 0.49	3.90 0.30	3.80 0.40	3.90 0.30	3.90 0.30
社会福祉学専攻（7）	3.86 0.35	4.00 0.00	3.57 0.49	4.00 0.00	4.00 0.00
科目等履修生・聴講生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
入学年次別（111）					
03生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
04生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
05生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
06生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
07生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
08生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
09生（1）	3.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00
10生（31）	3.61 0.49	3.77 0.42	3.45 0.56	3.81 0.40	3.84 0.37
11生（79）	3.51 0.65	3.71 0.53	3.52 0.52	3.57 0.63	3.77 0.42
部局別（111）					
経済・経営学研究科（57）	3.54 0.53	3.75 0.47	3.60 0.53	3.63 0.48	3.79 0.41
生物資源学研究科（37）	3.43 0.75	3.59 0.59	3.27 0.50	3.51 0.76	3.73 0.44
看護福祉学研究科（17）	3.71 0.46	3.94 0.24	3.71 0.46	3.94 0.24	3.94 0.24

全体集計結果（大学院・後期）

集計グループ（集計数）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体（102）	3.66 0.59	3.74 0.44	3.56 0.55	3.77 0.46	3.77 0.42
研究科専攻別（102）					
経済・経営学研究科（60）	3.85 0.36	3.72 0.45	3.65 0.54	3.78 0.49	3.85 0.36
地域・国際経済政策専攻（27）	3.74 0.44	3.70 0.46	3.59 0.62	3.74 0.58	3.74 0.44
経営学専攻（33）	3.94 0.24	3.73 0.45	3.70 0.46	3.82 0.39	3.94 0.24
生物資源学研究科（12）	3.33 0.85	3.67 0.47	3.33 0.47	3.75 0.43	3.67 0.47
生物資源学専攻（12）	3.33 0.85	3.67 0.47	3.33 0.47	3.75 0.43	3.67 0.47
海洋生物資源学研究科（13）	3.69 0.46	3.69 0.46	3.31 0.61	3.62 0.49	3.62 0.49
海洋生物資源学専攻（13）	3.69 0.46	3.69 0.46	3.31 0.61	3.62 0.49	3.62 0.49
看護福祉学研究科（17）	3.18 0.71	3.88 0.32	3.59 0.49	3.88 0.32	3.71 0.46
看護学専攻（8）	3.50 0.50	3.88 0.33	3.75 0.43	3.88 0.33	3.88 0.33
社会福祉学専攻（9）	2.89 0.74	3.89 0.31	3.44 0.50	3.89 0.31	3.56 0.50
科目等履修生・聴講生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
入学年次別（102）					
03生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
04生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
05生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
06生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
07生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
08生（0）	— —	— —	— —	— —	— —
09生（2）	3.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	3.50 0.50
10生（14）	3.50 0.50	3.79 0.41	3.43 0.49	3.64 0.48	3.86 0.35
11生（86）	3.70 0.59	3.72 0.45	3.57 0.56	3.79 0.46	3.77 0.42
部局別（102）					
経済・経営学研究科（60）	3.85 0.36	3.72 0.45	3.65 0.54	3.78 0.49	3.85 0.36
生物資源学研究科（25）	3.52 0.70	3.68 0.47	3.32 0.55	3.68 0.47	3.64 0.48
看護福祉学研究科（17）	3.18 0.71	3.88 0.32	3.59 0.49	3.88 0.32	3.71 0.46

1.4.2 授業公開

全部局の実績一覧を以下に示す.その詳細は2章「各部署のFD活動」にて報告する.

2011 年度授業公開一覧

学期	部局	授業名	担当	公開期間	参観数
前期	看護福祉学部	臨床病態学Ⅰ	加藤卓次 教授	随時	0 名
		臨床栄養学	垂水公男 教授	随時	0 名
		母子看護学Ⅱ（小児）	赤川晴美 准教授	随時	0 名
		基礎看護技術Ⅲ	笠井恭子 講師	随時	0 名
		解剖生理学Ⅰ	本田和正 教授	随時	0 名
		基礎看護技術Ⅰ	長谷川小真子 講師	随時	0 名
		成人看護学概論	有田広美 准教授	随時	0 名
		成人慢性看護学	有田広美 准教授	随時	0 名
		社会学概論	塚本利幸 准教授	随時	0 名
	学術教養センター	日本の文化と社会	学術教養センター教員	全 14 回	毎回 1 ～数名
後期	経済学部	生産管理論Ⅱ	木野龍太郎 准教授	1 月 30 日	4 名
	生物資源学部	科学英語Ⅱ（生物系）	村井耕二 教授	11 月 28 日	2 名
		科学英語Ⅱ（化学系）	濱野吉十 准教授	11 月 28 日	2 名
		化学Ⅱ	黒川洋一 講師	11 月 29 日	2 名
	海洋生物資源学部	水産経済学	東村玲子 准教授	11 月 15 日	5 名
	看護福祉学部	母子看護学概論Ⅱ（小児）	赤川晴美 准教授	随時	0 名
		母子保健学	赤川晴美 准教授	随時	0 名
		解剖生理学Ⅱ	本田和正 教授	随時	0 名
		看護管理学	交野好子 教授	随時	0 名
		看護教育学	月僧厚子 講師	随時	0 名
		基礎看護技術Ⅱ	笠井恭子 講師	随時	0 名
		看護学原論Ⅱ	笠井恭子 講師	随時	0 名
		母子看護学概論（母性）	交野好子 教授	随時	0 名
		基礎保健学	垂水公男 教授	随時	0 名

学期	部局	授業名	担当	公開期間	参観数
後期	看護福祉学部	公衆衛生・環境医学	垂水公男 教授	随時	0 名
		地域看護活動展開論	中谷芳美 准教授	随時	0 名
		看護研究	月僧厚子 講師	随時	0 名
		家族看護論	月僧厚子 講師	随時	0 名
		精神医学Ⅱ	大森晶夫 教授	随時	0 名
		ソーシャルワーク論Ⅳ	吉弘淳一 准教授 日根野健 准教授	随時	0 名
		社会福祉調査B	塚本利幸 准教授	随時	0 名

学術教養センターでは前期 123 科目，後期 167 科目を随時公開とした。

1.4.3 FD 研修

学内研修および学外の研修実績を一覧にして示す。それぞれの詳細は 2 章「各部局の FD 活動」にて報告する。

2011 年度 学内研修一覧

テーマ	講師等	開催形式	開催日	参加数
FD 合宿研修会	加納圭，水町衣里 ほか	研修会	8 月 26～ 27 日	17 名
授業改善の取り組みに関する意見交換会	生物資源学部教員	懇談会	10 月 18 日	21 名
外書講読担当者懇談会	経済学部教員	懇談会	3 月 2 日	17 名
日本におけるソーシャルワークの人材育成の課題－社会福祉士法の成立からカリキュラム改正まで	大橋謙策	講演会	11 月 1 日	12 名

2011 年度 学外研修一覧

参加イベント	主催者	日程	出張先	参加者
2011 年度 第 17 回 FD フォーラム	大学コンソーシ アム京都	3 月 3～4 日	京都産業大学	看護福祉学部 深沢 裕子 准教授 キャリアセンター 中里 弘穂 准教授

2. 各部局の FD 活動

FD 活動は 2008 年後期より部局主体で企画実施するようになった。それは、部局によって FD の意義が異なり、またその理解や普及の度合いも異なることが明らかになった為である。以下に、各部局の活動成果を部局担当者がまとめた。

2.1 経済学部（清水葉子・飛田正之）

経済学部の本年度の FD 活動は、毎年実施の「授業評価」「授業公開」に加え、新たな取り組みとして「外書講読担当者懇談会」を開催した。「外書講読」は 2 年次対象（後期）の必修科目であり、少人数方式で開講され、3、4 年次の「演習 I・II」の導入的役割を担う科目となっており、重要な位置づけを占めている科目である。またこの科目は経済学部の多くの教員が担当しているが、教材、講義内容は各教員で異なっており、これまで教員間で教材、講義内容、講義の進め方についての情報共有の機会がなかったため、実施することにした。以下では、「授業評価」「授業公開」「外書講読担当者懇談会」について、それぞれの概要を報告する。

2.1.1 授業評価

- ・前期の授業評価については、ほぼ例年安定的な推移である。項目別にみると、「関心は高まった」の値はやや減少傾向にあるが、「意欲的に取り組んだ」の値が増加している。
- ・後期の授業評価については、ほとんどの項目で値が向上する傾向にある。特に「授業方法」「総合」の項目は増加の割合が高い。
- ・前期と後期の授業評価では異なる値、傾向を示している。前期にくらべ、後期の授業評価の値が高い傾向がみられる。先に見たように前期はほぼ例年大きな変化はなく、後期は向上する傾向であったが、これにはいくつかの要因が考えられる。前期にくらべて後期の開講数が少ないこと、また前期に I、後期に II というように連続性がある科目があり、前期で学んだ内容に関心を持ち、後期の II を履修している者がいることなどが考えられる。
- ・今後は授業評価について、学年別、科目の位置づけ別（①必修科目：2008 年度～2011 年度入学の場合、経済学科 24 単位、経営学科 18 単位、②選択必修科目：2008 年度～2011 年度入学の場合、経済学科では指定された 24 単位の科目のうち 12 単位を選択、経営学科では指定された 32 単位の科目のうち 16 単位を選択、③それら以外の科目）、受講学生数別等に分け、授業評価を細かく分析する必要がある。

2.1.2 授業公開

経済学部では、後期に以下の授業公開を実施した。

授業名：生産管理論 II・15 回目

日時：1 月 30 日（月） 講義 10:40-12:10 検討会 12:15-13:30

担当者：木野龍太郎

受講者数：21 名

参加教員：4 名. 清水葉子准教授，田中求之准教授，廣瀬弘毅准教授，杉山泰之講師

概要

主に日本企業での賃金の決まり方について，欧米との比較を交えながら複数の考え方を理解させる内容. 学生の理解度を上げるための工夫が多く用意されており，毎回の授業で小テストを実施し，短時間で復習をかねて授業の理解度を上げている点，新聞記事など，教科書以外の教材が豊富に用意されている点，教材間のつながりが良く検討されている点が参考になる. 過去の授業公開での指摘をとりこんで改善がなされている.

参加教員からのコメント・感想

①参考になった点

- ・教材：ビデオや新聞が学生の意識を高めるために有効. 新聞記事や DVD など具体的・現実的な教材を多用されていて講義への関心を持ちやすい. 新聞（資料），講義，ビデオが有機的につながっていた. 関連する新聞の切り抜きが参考になる

- ・小テスト：毎回の小テストは学生の復習に対する意識を高めるために有効. 小テストをうまく使って学習させている

- ・その他：教科書を学生に読ませることも授業に集中させる効果がある. 教科書の音読は大講義では難しいが，学生の参加意識が高まりそう. 教科書を読ませて内容を確認していたこと. 良く整理された板書だと感じた. 賃金体系などについてアルバイトの例を挙げながら説明された点.

②改善の余地があると感じた点

授業の内容が終わってから新聞記事を紹介してはどうか（時間の都合もあるかと思うが）. 時間が限られているためか，せっきくの新聞記事が（すべて読み切れず）十分には活かされなかった.

③その他，気づいた点・疑問点など

板書はコンパクトで良かったが，もう少し説明を書いても良いのでは（教科書を読めば良いわけですが）. 小テストの返却の際，出席者の名前を覚えておられるのはすごいと思った. 教科書の予習等について何か特別に行っていることがあるか.

④今後の授業公開についての意見

FD も入学してくる学生の知識水準，関心など次の段階に移った方が生産的だと思われる.

ディスカッション（順不同）

授業の後半のテーマが賃金の決まり方であったので，学生が賃金に関心を持ちやすい就職

活動の時期になるよう考慮している。新聞→講義→DVD と、教材を使い分けている。小テストは毎回実施して、自己採点させている。小テストは遅刻防止の効果もある。評価は出席重視で行う。教科書の音読は、学生の負担が少なく授業に変化がもたらされて良い。DVD についてはテレビの特集番組などをマメにチェックするなどして教材に取り入れている。映像教材は授業の途中には入れにくく、(文脈から外れても) 授業の最後になりがち。配布資料はネットに掲載していつでもダウンロード可能にするなどの方法もあるが、本授業では基本的に事後には配布していない。

担当者のコメント

参加して頂いた教員や受講学生の皆様、ご協力やご意見有難う御座いました。最終講義でしたので時間内に何とか終わらせようと、若干急ぎ気味で説明をしたので、わかりにくい点も多かったかと思いますが、何卒ご容赦下さい。

コメントでは、口頭説明、板書、テキスト、配付資料のバランスについてのご意見を多く頂き、今後の講義に大いに参考になりました。特に新聞記事については、就職活動などにも役立つので、もう少し時間をかけて説明しても良いかと思いました。本当は、プロジェクターで映して説明したいのですが、セッティングに時間がかかるので出来ていません。起動時間が短い大型液晶モニタがあれば、もう少し活用しやすいのですが・・・。

授業公開は今回で 7 回目となり、これまで多くの方々にご意見を頂くことが出来ました。どれだけ反映出来ているかは心許ないですが、少なくとも自分の講義のレベルアップには役立っていると思います。何より、講義について議論する時間が持てることの意義が大きいと考えています。あとこの講義は、小テストやテキスト音読など、受講者人数が少ないからこそ出来ることもあり、受講人数が多くなった際に応用できるかなど、考慮すべき点が多くあるとも思っております。

2.1.3 外書講読担当者懇談会

経済学部では、学部専門科目 (2 年次配当, 2 単位) の少人数科目として、基礎ゼミ (前期) と、外書講読 (後期) の 2 つの科目を必修科目として開講しており、両学科あわせて約 20 名の教員によって担当されている。昨年度は基礎ゼミについての懇談会を行ったので、今年度は外書講読担当者の懇談会を開催した。

基礎ゼミと外書講読は、いずれもゼミナール形式の少人数教育の場となっており、大人数講義の多い経済学部で重要な位置づけを占めている。2 年次の学生が自発的な学習・研究態度を身につけ発表や議論に慣れて、3 年次以降の専門教育に進むための前段階の役割を果たしている。外書講読は、加えて、専門的な内容を外国語で理解する能力を身につけるという外国語教育の性格もあわせもっている。

日時：2012 年 3 月 2 日 (金) 14:40-16:00

場所：経済学部教授会室

参加教員：両学科から 17 名。

懇談概要

- (1) 各担当教員から、教材、テーマ・内容、授業の進め方などについて報告
- (2) 続いてフリーディスカッション形式で、工夫している点、気になる点などを議論

●教材は担当教員によってさまざまで、今回の懇談会では、まとまった本の特定の章、経済雑誌の記事、専門論文、日本人の書いた理論書の英訳、社説の英訳、企業のアニュアルレポート・日本の省庁のアニュアルレポートなどが挙げられた。映像教材と連動した外書講読を行ったケースもあった。教材ごとの長短所についても話し合われた。

●既存の翻訳の有無（内容理解に重点をおいてあえて既存翻訳のある教材を使うケースも）、学生が翻訳を担当する量・頻度なども、担当教員の方針によってさまざま。外書講読という授業の性格から、語学習得のための説明と、専門的内容の解説（特に理論部分の解説等）の時間配分をどうするかといったことも話題になった。

●英語以外の言語（今年度は中国語、ロシア語）では、学生の語学力に比較的大きな差があり、進め方に苦慮することも多い。内容を理解させる前に、語学学習としての解説に多くの時間を割いている。教材としては、新聞記事などを中心とするもの、インターネットを利用するものなど。各国経済について関心を持っている学生が多く、内容については多くの質問が寄せられる。

●学生をグループ化して協力させて進めることで、学生間のコミュニケーションを促進する効果があり、円滑な授業進行につながっている面がある。

●その他、外書講読の開講時期（外書講読の前期開講の検討、3年生からの演習Ⅰへのつなげ方、3年生からの少人数教育も含めて、それぞれの開講時期と就職活動のタイミングなど）、定期的な小テスト実施の学習効果なども話し合われた。一方、外書講読はカリキュラムを意識せずにテキストを選べるので自由度が高く、担当する楽しみがあるとの意見も出された。

2.2 生物資源学部（加藤久晴・黒川洋一）

生物資源学部の本年度のFD活動は、授業評価、授業公開を中心に行われた。その他に、各教員による授業運営上の工夫を聞き取ってまとめた上で、授業改善のための意見交換会を開催した。以下、順に述べる。

2.2.1 授業評価

「内容」、「関心」、「総合」については、前期、後期のいずれも低下する傾向にあったが、「関心」や「総合」は今年度（前後期とも）、横ばい、もしくは改善方向に転じている。特に「講義内容の理解」を反映する「内容」が改善されたことは特筆すべきことと考える。これは、「授業方法」の改善と相関があると考えられ、昨年度以降、各教員が学生の理解度を確認したり、関心を高めるなどの講義上の工夫が実を結んでいる（後述；2.2.3 など）と考えている。

2.2.2 授業公開

下記の3科目において公開した。

【授業科目名】

①科学英語Ⅱ（生物系） 村井耕二教授 2011年11月28日（月）1限 L204 参加者：宇多川，加藤（敬称略）

【授業方法・工夫で、参考になった点】

- ・ 英文文献をテキストとすることで、研究者としての雰囲気を持たせていた。
- ・ 和訳と共に、文章内容が解説されており、内容の理解を促す工夫があった。
- ・ 10名を指名し音読させることにより、集中させていた。
- ・ 講義冒頭で、科学英語を学ぶ意義、専門用語用の辞書、対象とする論文の種類、構成が説明されていたのは良いと思う。

【授業方法に関し、その他に気づかれた点、疑問点など】

- ・ テキスト内容がやや高度すぎないか？
- ・ レビューであるため専門用語が多く、その説明時間が多く取られすぎていると感じた。

【授業中の学生の態度で、気づかれた点】

- ・ 1名を除き、出席者全員が授業開始5分以内までに着席していた。
- ・ 程度は異なるが、全員メモは取っているようだった。
- ・ 音読の声が小さく、発表順番（訳）が終わると眠そうな学生が目立った。

【授業改善のため、学生が改めるべき点】

- ・ 遅刻をやめる。
- ・ もっと予習をするべき。
- ・ 携帯電話をいじるのは良くない。

【その他お気づきの点、今回の授業公開に参加したご感想など】

- ・ 先生の解説，説明に学生がついて行っているか？
- ・ 自分が科学英語を担当したときはひたすら和訳させることが多かったが，内容補足を増やしても良いのかなと思った．

担当教員コメント

テキストをもう少し簡単なものにする方が良いかもしれない．

学生に予習をさせるにはどうすればよいか，など難しい問題が多くある．

②科学英語Ⅱ（化学系） 濱野吉十准教授 2011年11月28日（月）1限 L205 参加者：宇多川，黒川（敬称略）

【授業方法・工夫で，参考になった点】

- ・ 板書が有効活用されていた．
- ・ 英語的な考え方が指導されていた．
- ・ 板書を写し取らせる時間，例題（英作文）に取り組ませる時間，辞書を引いて確認させる時間などを，要所要所に盛り込み，バランスよく，かつ緊張感を保った講義であったと思う．

【授業方法に関し，その他に気づかれた点，疑問点など】

- ・ 板書の文字をもう少し大きくした方がよいのでは．
- ・ 冠詞と定冠詞，可算名詞と不可算名詞など，日本語にはない英語上の概念を取り上げていた．さらに，科学英語で使われる表現と組み合わせることで，体系的に学ぶ助けとなっていた．

【授業中の学生の態度で，気づかれた点】

- ・ 遅刻が多いが，板書はよくノートしている．
- ・ たいへん真面目に受講している者が多かったが，30分間以上遅刻してくる者が数名いた．ノートを取るのも遅れ，自ら学ぶ気持ちを損なっていると思う．

【授業改善のため，学生が改めるべき点】

- ・ 遅刻をなくすこと．
- ・ 一時間近い遅刻者もあり，また，板書を取らないで寝ている者もいた．教師の創意工夫や熱意では，どうにもならない．遅刻をやめ，講義に集中すべきである．

【その他お気づきの点、今回の授業公開に参加したご感想など】

- ・ パソコンの活用もあってよいのでは．

担当教員コメント

有益な意見を参考に工夫したい。

③化学Ⅱ 黒川洋一講師 2011年11月29日(火)1限 L208 参加者:宇多川,加藤(敬称略)

【授業方法・工夫で、参考になった点】

- ・ 授業始めの、化学に関する話題提供は学生を集中させるのに有効.
- ・ 小テスト結果レビューは詳細だった(高得点者の紹介など).
- ・ 今後の授業スケジュールの確認による、授業目標の明確化.

【授業方法に関し、その他に気づかれた点、疑問点など】

- ・ スライドを多用し、分かりやすい話題を提供しながら興味を持たせている.
- ・ プリントと板書,スライド,教科書を有機的に結びつけて有効活用している.

【授業中の学生の態度で、気づかれた点】

- ・ 板書はノートしており、集中しているように思われる.
- ・ 若干の遅刻者はいたが、ほとんどが5分以内であった.

【授業改善のため、学生が改めるべき点】

- ・ マフラーは必要か?

【その他お気づきの点、今回の授業公開に参加したご感想など】

- ・ 208教室の黒板は小さいのではないかと(→書ききれない,文字が小さくなる,引き延ばすとスライドが隠れる).
- ・ 窓側のスライドは明るくて見づらい

担当教員コメント

黒板やスライドの見やすさの工夫についてご指摘いただいたので、今後改めたいと思う。
30分以上の遅刻者は出席扱いしていない。毎回、講義の冒頭に導入部分を設け、講義の復習等を行うなどの工夫をしているのに、現実には遅刻する者が数名いる。

話を聞く、ノートを取ることに集中する時間を作っているほか、講義中に数名を指名して質問に答えさせたり、問題を解かせたりするなど、90分間の講義のリズムを作る工夫を試みている。

2.2.3 授業改善のための意見交換会

生物資源学部では、授業に対する関心を持たせるための授業改善の試みに、継続して取り組んでいるが、昨年度の「FD 座談会」に続いて、今年度は各教員の授業改善の工夫を取りまとめ、情報を共有したほか、学生の理解度に関する問題点、改善方法などに関して意見交換を行った。

1) 懇談会「生物資源学部の授業改善の取り組みについての情報収集ならびに意見交換」

日時・場所：2011年10月18日（火）16:30－17:30 生物資源棟 1F 会議室

参加者：生物資源学部教員(21名)

【概要】

今年度前期における授業改善の取り組みをまとめたところ、各教員が学生の理解度の現状把握やその対応を進めている様子が明らかとなる一方、学生の学習態度および意欲に関する問題点が明らかとなった。前者では、学生の理解を確認する工夫（①）、学生の抱える問題を把握し、改善に努めた例（②）もあった。一方、後者では、遅刻する、積極的に学ぼうとしないなどの「学ぶ意欲の低さ」が認められた（③）。意欲の低さは、理解度の低さにも繋がっていると推察され、学生の理解度の低さの原因をどう考え、どう対策するか意見交換を行った。

①【理解度を把握する、または理解度を高めるための工夫】

- ・ 基礎用語の理解を促すため、教科書の單元ごとに小テストを実施している。
- ・ 講義中に小テストを行い、理解度の確認を行っており、小刻みに勉強の機会を与えるのに役立っている。
- ・ 講義終了直前にミニッツ・ペーパー・レポート（授業内容の考察課題、質問などを書かせるもの）を実施しており、学生の理解度の把握に役立っている。
- ・ 講義内容の理解度を学生自身が判断できるよう、演習問題を解かせ、その解説を行っている。学生自身の理解度の向上や、理解が不十分な点の把握に有効と思われる。
- ・ 毎回の講義冒頭で、前回の復習点、当日の講義のポイント等を説明している。プリントを配布したほか、重要な項目を中心に板書させている。
- ・ ノート作成が大切であることを認識させるために、配付プリント中の図表も板書している。今年度は、取り上げる項目数を 3/4 程度に減らして 1 項目あたりの説明時間を長くした。
- ・ 現象に対する用語の定義をしっかりと教えることを心がけた。植物を知らない学生のために、できるだけ植物の実物が写真を見せることを心がけた。
- ・ 授業が日常生活に直結していることを認識させるために、食品汚染や食中毒などの問題を考えさせたり、実務経験者に、衛生管理の手法を講義して頂くなど実践的な授業を行った。一方、食品ラベルにある添加物の名称、使用目的などを調べさせた。

②【問題点の原因を探り、改善に努めた例】

- ・ 再履修者が増える原因を知るために授業中にアンケートを行ったところ、専門用語が多く、重要なポイントを絞りにくいことが原因と分かった。そこで今年度からは、講義の最後に重要なポイントと専門用語の再確認を行うことにした。
- ・ この2、3年、授業がフォローできない学生が増えているので、昨年度よりもさらに講義内容を減らしたほか、当該講義で特に学ばなければならない重要事項を把握させるため、毎回授業開始時にミニレポートとして課題を解かせ、さらに試験に出すことにした。

③【学生の態度の改善が必要と思われる例】

- ・ 授業終了前に、教科書の演習問題を解かせているが、問題を解こうとしない学生もいる。
- ・ 農作物や食などの身近な事象に関して、化学的解釈を解説するように努めたが、聞いているのか、理解しようとしているのか反応がない者がいる。
- ・ 授業開始時にミニレポートとして課題を解かせ、さらに試験に出すことにしているにも関わらず、ミニレポートの復習さえもやってこない学生がいる。今後どのようにして学習意欲を持たせるかは検討課題である。
- ・ 毎回の講義冒頭では、前回の復習点、当日の講義のポイント等を説明しているのに、学生が大幅に遅刻してくると聞き逃してしまい、自身のやる気、集中力を削いでしまっている。
- ・ 理解すべき重要なポイントは口頭で説明し、板書しているが、テストでは覚えるべき基礎的な単語や概念などの知識が身に付いていない者、文章で説明できない者もいた。

まとめ

- ・ 理解度の低下は、ゆとり教育で基礎学力がついていない学生がいることにも関連すると考える。しかしながら、その一方で、きちんとした学力を持つ学生がいるのも事実である。
- ・ 生物資源学部の教員は、学生の理解度の確認をし、上記のような講義上の工夫を行って、問題に対応している。
- ・ 教員側がいかなる工夫を行っても、学習意欲を見せない学生に対する、即効性のある効果を期待するのは難しい。

2) 授業公開後の意見交換会

日時・場所：2011年11月29日（火）12:15－12:50 生物資源棟 1F 会議室

参加者：宇多川，村井，濱野，加藤，黒川（敬称略）

「受講者人数について」

- ・ 少人数（昨年度の不合格者数名あり）のクラスで開講することで、受講者全員に当てて答えさせるようにしたい（科学英語Ⅱ）。
- ・ 今年は、昨年度不合格者に加え、初めて履修する者が3名ほど受講していたため、当該年度学生と合わせ50名以上の受講者がいた。テストやアンケートの集計、スライドや黒板

の見やすさなどに弊害をきたさないためには、適正人数は 50 名以下かと考えている（化学Ⅱ）。

「講義の仕方について」

- 学生が講義に集中しないのが、講義が面白くない、単調であるなどが理由であるなら、何らかの講義上の工夫が必要であろう。
- パワーポイントのみで講義を進めると、スピードが早くなりすぎるきらいがあり、考えさせる時間を作る必要があるのでは？
- 講義中に問題を解かせる演習形式を導入することは、学生の理解度を確認したり、問題の考え方を学ばせたりするのに有効と考えられる。

「遅刻について」

- 遅刻が多い学生は、テストのでも悪い（科学英語Ⅱ）。
- 遅刻が多い、あるいは欠席しがちな学生には、アンケート結果によれば、化学に対する苦手意識を持つ者が多いと分かった（化学Ⅱ）。
- 教員がどれだけ講義上の工夫を行っても、学生が遅刻すると水の泡である。遅刻すると、講義の導入部などを聞き逃し、学生自身、ますます勉強ぎらいを招くこととなり、また、教室内の静寂な雰囲気を損ねてもいる。
- 「講義には 10 回以上出席しないといけない＝5 回までは欠席してもよい」と捉える学生がいる時勢であるが、遅刻に関しても厳密に対応する必要があるのでは？

2.2.4 授業改善のための工夫

2.2.3 で行った意見交換会 1) の開催に先立って、教員が担当する講義、実験での工夫をまとめたもの（2011 年度前期）を、下記に記す。

授業科目名	曜日・コマ	担当者	授業方法, あるいは授業工夫内容など
植物病理学	前期金曜 2 限	加藤久晴	本年度において、授業開始時に出席を兼ねて小テストを数回試みた。シラバスには掲載していないため、試行であること（評価の対象としない）、およびノートを参照しても良いことを伝えた上で行った。前回の授業のポイントとなる語句について問い、自己採点してもらう形式であったが、学生の様子を見る限りまじめに取り組んでいるようであった。講義における小テスト等は多くの教員の方が取り入れておられるが、今回の試みの結果、やはり理解の助けになると感じられたことから、来年度からは本格的に導入したいと考えている。
生体高分子化学	前期火曜 1 限	黒川洋一 （日辛先生と分担）	初回は、蛋白質科学の成立の歴史、蛋白質の利用など全講義の概要、および蛋白質科学における「化学」の立場での見方の重要性を話したほか、毎回の講義冒頭では、前回の復習点、当日のポイント等の講義の流れの説明を行った。重要な項目は板書し、テストで問うと予告した上で、基礎的な単語や概念の定着を見るための小テストを 1 回だけ行ったが、覚えるべき知識が身に付いていない者、論理的な文章で説明できない者も何人かいた。図や表から読み取れることを表現させることを講義内で試験的に始めたほか、来年度以降、理解度を確保するための小テストの導入を検討している。
科学英語 I	前期月曜 1 限	伊 藤 貴 文 (石川先生と分担)	生物や化学の知識を考慮しながら、遺伝子工学、タンパク質工学の歴史を話題とできるような英語で書かれた文章を選び、輪読した。また、DNA シーケンサーやプロテインシーケンサーについての簡単な広告を利用したり、実験室で日常的に触れる器具や試薬などを英語で発音したりと、とにかく英語に慣れることを考えて授業を行った。
栄養化学	前期木曜 1 限	高橋正和	例年通り小テストを 3 回、また期末試験とは別に中間試験を 1 回実施。小刻みに勉強の機会を与えるという意味でも役立っているようです。また配布プリントに図表をたくさん入れています。今年は OHC を時々使って配布プリントの図表説明を行いました。黒板に図表を書き写す手間もなくなり、便利になりました。理解度低下が全学委員会で指摘され

			ていたようですので、中間試験を簡単にしましたが、点差が開きました。例年通り、中間試験の際に独自アンケートをとっていますが、正直に勉強不足と答えている学生が多かったのが印象的です。
遺伝学Ⅰ	前期水曜2限	村井耕二	毎回授業の終わり 10 分に、ミニッツ・ペーパー・レポートを書かせている。ここでは、その日の授業内の内容についての考察課題を一つ、それから質問などを書かせる。これによって、学生の理解程度を知ることができる。毎回これを行うことによって、学生たちも遺伝学の内容について考える習慣が身についてきたと実感している。さらに、確実に出席したことを知ることができる。
生物資源学 特別講義Ⅰ	前期金曜1限 隔週	村井耕二	教えるべき項目を厳選し、時間をかけて理解させるようにしている。複雑な内容でも時間をかけると理解できると実感する。また、本講義と実験をタイアップさせることにより、理解を助けることができる。
一般微生物学	前期水曜1限	木元 久	年々、再履修者が増える傾向にあり、その理由を授業内アンケートで調査した結果、専門用語の多い微生物学では重要なポイントを絞りにくいことが原因であった。そこで今年度からは、講義の最後に重要なポイントと専門用語の再確認を行うことにした。
分子生物学	前期木曜2限	石川敦司	授業中に参考となる動画を何回か見てもらった。学生にとっては、映像は分かりやすらしく、評判は良かった。ただ、映像では内容が単純化されすぎる場合が多いため、注意が必要だとも感じた。また授業終了前に、教科書の演習問題（解答有り）を解いてもらう時間をとった。しかし、問題を解かない学生もあり、改善の必要があると考えている。
食品衛生学	前期水曜1限	宇多川隆	今年度より担当。食品衛生学は身近な学問であることを認識させるために、授業直前に世の中で起こっている食品衛生がらみの話題を資料等で配布し、教科書と共に考えさせることとした。前期には、放射線の食品汚染や焼き肉店の食中毒事件等が起こり、ホットな事例を考えさせることが出来たと考えている。HACCP に関しては、福井県の実業の衛生指導をされてきた専門の講師にお願いし、食品工場の衛生管理の手法を分かり易く講義して頂くなど、実践的な授業にも心掛けた。レポートとして日頃食している食品のラベルから、使用されている添加物を調べさせ、それが何のために使われているのかをまとめさせた。授業が日常生活に直結している事を認識させるのに有効であったかと思う。

農産物利用学	前期木曜1限	大東 肇	利用面からみた農作物の分類, 食用作物の利用成分や機能の化学的理解を中心に講述した.工夫というほどのことはしていないが, 身近な事象の化学的解釈はできる限り解説するように努めた.聞いているのか? 理解しようとしているのか反応がないことも事実です.
生物学 I	前期金曜2限	岩崎行玄, 鈴木寛	生物学 I は, 生物学 II とセットで, 高等学校で習う生物学の内容を復習するとともに, 専門教育への橋渡しを行う講義と位置付けている.生物学 I では, 生体高分子, 代謝, 細胞内小器官, 遺伝子とタンパク質に焦点を絞っている.基礎用語を理解しないと正確な考察ができないので, 单元ごとに小テストを実施し (合計 4 回), 期末試験で総理解を検証している.
生化学 I	前期月曜2限	岩崎行玄	生化学 I は, 生化学 II, 分子生物学, 細胞工学, 分子育種学, 合計 5 科目と連動して開講されている.Essential 細胞生物学をテキストに選定し, 生化学 I は, この中で, 第 1 章から第 4 章を分担している.章末の演習問題を丁寧に解くこと, テキストの記述を深く理解することを目標に, 丁寧に教科書を読むことを実施している.
分析化学	前期火曜1限	植松宏平	前期終盤の講義で, 講義内容の理解度を学生自身が判断できるよう, 演習問題を解かせその解説を行った.理解度の向上や, 理解が不十分な点の把握に有効だったと思う.ただ正答率が高くはなかったため, 学生自身が自分の理解度を随時把握できるよう, 時間の許す限りこまめに演習問題を解かせる, 配布資料における演習問題の量を増やす等の対策が必要のように思われた.
環境生物学	前期木曜2限	吉岡俊人	ノート作成が大切であることを認識させるために配付ハンドアウト中に記載している図表についても板書するようにしている.また, 少しでも英語に馴染ませることを目的にして大事な語句等について英訳を示すとともに, 初回授業の時に期末試験で英語問題を出題することを宣言している.今年度は, 例年に比べて取り上げる項目数を 3/4 程度に減らして 1 項目あたりの説明時間を長くした.期末試験の結果を検討して上記の事項が適当であったかどうかを判断し, 来年度の授業計画の参考にする.
植物育種学	前期月曜2限	大田正次	今年とくに工夫したことはない.現象に対する用語の定義をしっかりと教えることを心がけた.植物を知らない学生のために, できるだけ, 植物の実物か写真を見せることを心がけた.

植物生理学	前期金曜1 限	大城 閑	この2, 3年, 授業がフォローできない学生が増えているので, 昨年度よりもさらに内容を減らした. 植物生理学は非常に範囲が広いので, 何が重要で特に学ばなければならないかを把握するのが難しい. この点を考慮して, 毎回の授業の始めに行っているミニレポートの課題を試験に出すことにして, 少なくともその点さえ復習すれば良いようにしているが, それさえもやってこない学生がいた. 今後どのようにして学習意欲を持たせるかを考えてみたい.
導 入 ゼ ミ (フィールドで科学する)	前期水曜2 限	大田正次	経済学部学生4名, 海洋生物資源学部学生5名, 生物資源学部学生1名の受講者. 「学生自身が興味あることを, 具体的データで裏付けて, レポートと発表にまとめること」, 「他人に説明するという立場で文章を書くこと」, 「文章を書き直す手間を惜しまないこと」がねらい. 一度やってみたかった「とことん, 待ちの姿勢」の授業を試してみた. 授業の前半3回で, 教員自身がプチネタで書いた論文を紹介した. 受講学生の所属を考えて, できるだけ生物資源色を出さないような内容を選んだ. その後, 学生の希望で4つのグループを作り, それぞれで日頃疑問に思っていることなどをテーマに選び, 毎回進捗状況を発表させ, 次の仕事を検討することをくり返した. 内容が進んでいないときは, 時間中に図書館などで調べさせた. レポートについては, 2回添削し書きなおしたものを最終版として提出させた.

2.2.5 FD 研修

以下のF-レックスの研修事業であるFD合宿研修会に参加した.

日 時 2011年8月26日~27日

会 場 福井県立大学小浜キャンパス

参加者および報告者 加藤久晴 准教授

FレックスのFDチーム企画による, 第2回の合宿研修会に参加した. 初日は「専門分野と対話力を考える」(京都大学・加納圭先生, 福井大学・佐分利豊先生講演) およびスキルアップ講座「伝える力を養うーサイエンス・コミュニケーション・トレーニングー」(京都大学・加納圭先生, 水町衣里先生), 2日目は「キャリアプランを描くには?」(福井県立大学・中里弘穂先生, 株式会社大津屋・小川明彦氏講演)と題して行われた. そのうち, 加納先生の講演について報告する.

講演では, 京都大学 iCeMS・科学コミュニケーショングループの取り組みの一つである, 若手研究者が科学コミュニケーション能力を身に付けるためのトレーニングプログラムに

ついて、日本における科学コミュニケーションの歴史を交えながら紹介して頂いた。そのプログラムの一つである「サイエンスカフェ」において、一般市民の方と対話を行う上で重要となるのは「伝える」「聞く」「分かち合う」の3つを要素とする双方向コミュニケーションであるとのことであったが、一般市民を学生に置き換えてみると、これは大学での授業にも当てはまると感じた。私の場合、より良い授業にしようと自分なりに工夫してきたつもりではあるが、基本的には知識を一方向的に解説し、試験でその理解度を確認するという旧態依然とした内容であり、コミュニケーションがあまり得意でないこともあって「双方向」を無意識的に避けてきた感がある。専門科目の授業内容は、ある程度一方向的になるのは仕方ないとは思われるが、今後はもっと積極的に学生の気持ちをくみ取り、そしてお互いに成長を感じる喜びを分かち合えるよう、「双方向」を意識した授業作りに取り組む必要性を感じた。

2.3 海洋生物資源学部（加藤辰夫）

2.3.1 授業評価

海洋生物資源学部の授業評価アンケートの参加は、前期については、参加教員数 16 人で参加比率 100%、参加科目数で 25 科目、比率は 96.2%であり、後期については、参加教員数 15 人で参加比率は 88.2%、参加科目数で 26 科目 74.3%であった。前期はほとんどの科目について実施されたが、後期は参加比率が低下した。後期に実施しにくい事情があるのかもしれないが、事情を調査したうえで今後の対応を検討したい。なおコメント回答率については他学部にくらべて高く、前期 68%、後期 90%とさらに向上した。

授業評価の結果については、3 年前からの入学生について評価の平均値が顕著に低下していることが明らかになっている。前期は他の学部も同様の傾向がみられたが、後期は海洋生物資源学部だけに顕著な低下傾向がみられた。項目別の平均値については、「授業の内容が理解できたか」「この授業の分野への関心が高まったか」が特に低い傾向があり、学生が授業への関心を持てず、内容が理解できない傾向が高まっている可能性がある。

前期の結果が出た段階で学部の会議において検討したが、その原因については明らかになっていない。意見としては、学部別・学年別の平均値だけでは低下の原因は明らかにできないこと、平均値の低下に比べて標準偏差が大きいこと、低下自体が明白でないこと、統計分析のデータとしては不十分であることなどが指摘され、原因を示唆するような意見はなかった。しかし、後期についても平均値の低下傾向がみられたので、データの信頼性を考慮しつつ、あらためて原因の究明をおこなう予定である。低下傾向がみられた 3 年前の入学者は学部化後の入学者であり、かつ、本格的なゆとり教育をうけた世代の入学者でもあるので、それらとの関係があるのかについても検討課題とする。

2.3.2 授業公開

後期において下記1科目について授業公開を実施した。当学部においては随時公開ではなく、特定日を公開して参加をよびかける方法をとった。多数の科目を随時公開しても参加者がいないということになれば意味がないと考えたからである。

【実施概要】

担 当 ： 東村玲子 准教授

授業科目：水産経済学

受講者 ： 海洋生物資源学部 3 年次生

場 所 ： 204 教室

公開日 ： 11月15日（火）2時限

参加教員数：5名

授業公開の実施方針として、授業改善への関心を高めることを目的とし模範授業ではないことを周知のうえで実施している。普段知ることのない他の教員の授業に参加し、担当教員や他の授業参観者との意見交換を通じて、授業をより良いものにするためのヒントを得るた

めの機会を提供することを目的としている。

◇ガイドライン：授業公開に参加するうえで守ること

- (1) 授業の方法・工夫に注目する
- (2) 積極的に意見を交換する
- (3) 授業の内容に立ち入った議論・批判は行わない
- (4) 授業の障害にならないよう配慮する

以上の方針によって授業公開を実施し、5名の参加があった。参加者は少なかったが、以下のような貴重な意見をいただきました。

- (1) 参考になると思われること

黒板の内容がわかりやすく、声も大きくて聞き取りやすい
小問題により、学生の興味を引きつけ、集中力を高めている
配布資料の中に書き込ませる工夫が効果的だと思う
まとめもあって、わかりやすい

- (2) 改善したらよいと思われること

PPTの文字や線を工夫し説明を入れたほうが理解しやすい
小問題で学生に考えさせる時にも、趣旨説明や質問をするなどした方がよい
配布資料の中に表記ミスがありました

2.3.3 FD 研修

今年度のFD研修は、小浜キャンパスにおいて開催されたF-LECCS合宿研修会へ随時参加することを呼びかけたところ、小浜キャンパスの教員のおよそ6割、延べ15名の参加があった。

- (1) 開催日：8月26日（金）～8月27日（土）
- (2) 場所：福井県立大学小浜キャンパス TV講義室
- (3) 内容：

セッション1 講演「専門分野と対話力を考える」加納圭、佐分利豊

セッション2 スキルアップ講座「伝える力を養う」加納圭、水町衣里

セッション3 講演と演習「キャリアプランを描くには？」中里弘穂、小川明彦

2.4 看護福祉学部（深沢裕子・塚本利幸）

本年度実施した授業評価，授業公開，FD 研修を以下で報告する。

2.4.1 授業評価

看護福祉学部の授業アンケート平均について過去 10 年の推移を概観すると、「授業の内容が理解できたか」「この授業の分野への関心が高まったか」「先生の講義の方法はどうだったか」は 2006 年に最高値を示し，その後わずかずつ低下している.今年度前期のアンケートではわずかに改善しているが，この傾向が続くものかはまだわからない.「先生の講義の方法はどうだったか」と「この授業の分野への関心が高まったか」は，どの年も 2 項目が近値を示している.「授業の内容が理解できたか」は毎年，先の 2 項目よりも低い結果で，ここ 2 年特に低下している.一方このような低下の傾向とは異なる推移を示しているのが，「意欲的に取り組んだか」への回答である.この項目だけは 2006 年以後同じかわずかに上昇している.そのため，以前は「意欲的に取り組んだか」と「授業の内容が理解できたか」は近値だったが，ここ 2 年は「理解できたか」が「意欲的に取り組んだか」より低い結果となった.このような授業アンケート結果の解釈については，学科ごと、学年ごとの結果をみて考える必要がある.

2.4.2 授業公開

2.4.2.1 看護学科

現在，看護学科では随時公開制をとっている.一昨年に行った教員へのアンケートの結果，現在は必ずしも授業公開という方法が望まれている訳ではなく，目的にそって必要なときに授業参観できることが望まれていたためである.今年度は23・24ページの通りの授業が公開されたが，参観した教員はなかった.

2.4.2.2 福祉学科

これまで通りチーム員からの依頼による授業公開を前期 1 件，後期 3 件実施した.
全教科とも随時公開とした.
事前の連絡は不要.他学部の教員も参観可.授業開始時までに要入室.

<実施詳細>

◇前期

担 当 ：塚本利幸 准教授

授業科目：社会学概論

配 当 ：社会福祉学科1年次生

時 間 ：10:40-12:10

場 所 : L209教室
公開日 : 随時公開 (月曜)

◇後期

担 当 : 大森晶夫 教授
授業科目 : 精神医学Ⅱ
配 当 : 社会福祉学科1年次生
時 間 : 16:20－17:50
場 所 : L210教室
公開日 : 随時公開 (月曜)

担 当 : 吉弘淳一, 日根野建
授業科目 : ソーシャルワーク論Ⅳ
配 当 : 社会福祉学科2年次生
時 間 : 9:00-10:30, 10:40-12:10
場 所 : N251教室
公開日 : 随時公開 (水曜日)

担 当 : 塚本利幸 准教授
授業科目 : 社会福祉調査B
配 当 : 看護学科・社会福祉学科2年次生
時 間 : 10:40－12:10
場 所 : L212教室
公開日 : 随時公開 (木曜)

◇基本方針 : [授業公開は授業改善への関心を高めることを目的とします]

授業公開は、普段知ることのない他の教員の授業に参加し、担当教員や他の授業参観者との意見交換を通じて、自分の授業をより良いものにするためのヒントを得るための機会を提供することを第一の目的とします。

授業公開は模範授業ではありません。大学教育において一つの理想型などあり得ず、教育の自由が保障されるなかでこそ、より良い授業を育むことができるでしょう。そのため、授業の内容について批判を行うのではなく、お互いを尊重しながら、特に授業の方法について教員同士が学び合うことを目指すものです。

◇ガイドライン : 授業公開に参加するうえで守っていただく約束事

- (1) 授業の方法・工夫に注目する
- (2) 積極的に意見を交換する

(3) 授業の内容に立ち入った議論・批判は行わない

(4) 授業の障害にならないよう配慮する

◇授業公開

通常の授業：90 分

参観教員は感想などを記録して担当教員にe-mailで送る。

↓

概要の報告：e-mail による

授業公開の担当教員が e-mail で教育学習支援チームに授業公開について簡単な報告を行う。

これらの方針によって授業公開を実施したが、参観者数は0名であった。

参観者がおらず実質的に授業公開が成立しない傾向が続いており、全教科を随時公開としたが状況を変えられなかった。実習・演習科目が多く時間割がタイトであることも大きな要因だと考えられる。今後の方策としては随時公開制をとりながら、参観の義務を何らかの形で付与することも考えられる。また、担当授業に関する問題点、疑問等について学科教官が意見交換する場を設けることも必要であろうと考える。

2.4.3 FD 研修

本年度実施したFD研修は学内研修が1件、学外研修が1件であった。

◇実施概要

FD研修概要

分類	実施日	内 容	参加者数
学内 研修	2011年 11月1日	日本におけるソーシャルワークの人材育成の課題－社会福祉士法の成立からカリキュラム改正まで 場所：本学 N404教室 講師：大橋謙策（日本社会事業大学大学院特任教授）	教員 12名 (社会福祉学科10名, 看護学科1名, 学術教養センター1名)
学外 研修	2012年3 月4日	第 17 回 FD フォーラム（大学コンソーシアム京都主催） 第一ミニシンポジウム 「大学授業のパラダイムシフトを目指して」	看護学科 深沢裕子

2.4.3.1 学内研修

日時：2011 年 11 月 1 日（火）9:30～11：30

場所：看護福祉棟 N404 教室

参加数：教員 12 名（社会福祉学科 10 名，看護学科 1 名，学術教養センター 1 名）

講演テーマ：日本におけるソーシャルワークの人材育成の課題－社会福祉士法の成立からカ

リキュラム改正まで

講師：大橋謙策（日本社会事業大学大学院特任教授）

司会：小林明子

◇講演概要

・社会福祉教育の問題を考える上で、学問体系の再編成が必要である。認識科学、分析科学だけでなく、設計科学も重要である。社会福祉学とは、生きる哲学、価値の重要性を基礎とし、労働経済学の視点にたった社会政策から抜け出る必要性を感じてきた。社会福祉学の固有の分析科学には、心理学、社会学、医学の視点も取り入れながら、解決の方策を立てることが必要である。自分の生活を客観化する力がない問題を抱えた人々の課題を把握し、インフォームドコンセントに基づいて支援していく、それを評価していく実践科学である。

・社会事業の復権が重要である。戦後の社会福祉は、消極的社会事業、つまり物を与えることにだけ目がいき、制度を教える社会福祉教育となってしまった。戦前の積極的社会事業は公民館の社会教育分野に残っていった。積極的社会事業の側面、本人が自ら立ち直ろうとする意欲、精神的自立を重要視する。1970年代以降の新しい貧困の問題がでてきた後、金銭給付が問題解決につながっていない生活保護の問題がある。資本主義の生産様式の矛盾にのみ注目するのではなく、問題を抱える人の主体性、生きる意欲に注目すべきである。ソーシャルワーク実践を研究し、理論化してほしいというのが厚生労働省の考え方で、厚生労働省以外の分野、学校、住宅政策、法律政策等において、ソーシャルワーク機能が存在している。

・社会福祉士法の制定時の状況として、1986年の国際ソーシャルワーク会議で日本にソーシャルワーク資格がないことを指摘され、厚生労働省が制定に動いた。しかし、ケアワークと比較して、ソーシャルワーク業務が分かりにくいという指摘があった。

・2000年のカリキュラム改正について、以下のことが指摘できる。1990年以降、市町村ごとでの在宅福祉サービスの推進によってソーシャルワークの創意工夫が初めて求められた。しかし、政策においては社会福祉制度と従事者政策が乖離したままであることが問題である。1970年代以降、イギリスにおけるケースワーク、グループワーク、コミュニティオーガニゼーションの統合化の影響を受けて、アメリカでジェネラルソーシャルワークアプローチが発展した。従来のクライアントというとらえ方から、アセスメントし、解決するというイギリスの2000年のNHS改正時のケアマネジメントの発想が取り入れられた。1997年に学部教育の中で医療、看護、福祉のIPE（interprofessional education）の必要性を唱えてきた。2003年からイギリスではIPEをやっている。2000年のカリキュラム改革では、社会福祉方法の統合化が進んだ。しかし、分野各論の廃止、ケアワークとの連動、実習時間の延長、地域型社会福祉実習はうまくいかなかった。

・2007年のカリキュラム改正について、以下のことが指摘できる。2006年に介護保険制度改革があり、地域包括支援センターの設置に伴い、相談援助に連絡調整機能を加えることになった。この改正では、分野各論の名称廃止、ソーシャルワーク機能、事例研究の重視がポイントであった。

・地域包括ケアシステムの時代における養成課題として、ジェネラルソーシャルワークアプ

ローチ、コミュニティソーシャルワークの必要性が挙げられる。特に、ソーシャルキャピタル、ソーシャルエンタープライズの視点から住民と行政の協働に対する国の補助が付き始めた。アセスメントシートが電子化される動きがあり IPE がますます重要になるだろう。市町村地域福祉計画とソーシャルワークケアサービス従事者の研修システムに大学が地域貢献活動として参加することが必要である。

◇質疑応答

質疑応答：

質問 1：戦後の福祉において自立の流れはなかったのか。

応答 1：なかったわけではないが、制度政策としては切り捨てていた。制度の枠の中でサービス提供していた時代が長かった。新しい社会システムとして行政と住民が対等の立場でソーシャルガバナンスを進めていく必要がある。自分を表現していくための遊びが重要、民衆娯楽の研究などは社会福祉教育では教えられていない。

質問 2：歴史の授業がカリキュラムからなくなった影響について。

応答 2：養成施設用のカリキュラムであって、大学教育のカリキュラムではない。もっと自由にカリキュラムをやればいいと厚生労働省は言っている。哲学、価値、歴史、教養が大切である。

質問 3：福祉におけるニーズとは？

応答 3：福祉におけるニーズは、労働の喜び、精神的・文化的自立、身体的・健康的自立、生活技術的自立、社会関係的自立、政治的契約的自立の要件から分析することを考えている。

質問 4：欧米の SW 実習は長期間にわたるが、どうお考えか。

応答 4：SW 教育が講座制でなく、学科制でないため。講座制によって教員を育てていく必要があるのではないか。

2.4.3.2 学外研修

第 17 回 FD フォーラム

第一ミニシンポジウム「大学授業のパラダイムシフトを目指して」

主催：大学コンソーシアム京都

日時：2012 年 3 月 4 日（日）10:00～15:00

場所：京都産業大学

研修参加・報告：深沢裕子

◇シンポジウム概要

2008 年中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」において、学士力（課題探求・問題解決）達成のためには双方向型の授業、学生の主体的な参画を促す授業が不可欠とされた。しかし、「知識伝授という古いパラダイム」から「学生とともに構築するという新しいパ

ラタイム」への転換は進んでいない。この現状をテーマとしたシンポジウムに参加した。異なるタイプの授業方法を実施してきた教員から、その効果などについて振り返って報告がなされたので、資料集から抜粋、要約して報告する。

報告1) 従来型の授業にこだわり続けた35年間の授業実践の報告 (立命館大学 大平祐一)

- ・ 学生への質問：近年は「分かりません」という返事が多く、授業の活性化につながらないので、学生に対して質問はしなくなった。
- ・ 授業アンケートが導入されて：
手作りで授業アンケートを実施していた時と比べて、授業期間内に集計しないので、その結果を手がかりに教員と学生がコミュニケーションを深めることができなくなった。
- ・ 文献学習：参考文献を提示しても学生は読んでいない。自学自習に向かわせる何か促進剤が必要である。
- ・ 学生の目の輝きが減退している。

報告2) 学生参加型授業は万能か—学生参加型授業の実践経験から— (静岡大学 佐藤龍子)

- 知識伝授型は10教えたと思っても学生は3割も理解していない場合が多い、しかし、だからといって学生参加型授業は万能ではない。
- ・ 「体験学習慣れ」していて、その場では積極的に参加しているが、自分の問題として引きつけて深めていない学生もいる。
 - ・ 学生参加型授業であっても、全学生が参加している訳ではない。事前事後学習が欠かせない。
 - ・ 学生参加型授業は、教員の負担（事前準備、授業中のコーディネート力、学生の意欲喚起、事後のフォロー、毎回のミニツツペーパーへの返事、知識を伝授する部分と学生主体で行う部分との兼ね合い、成績評価など）とメリットがともに大きい。
 - ・ 学生は文章を理解し想像力を膨らませることをしていない。じっくり本を読み、内容を理解し、レジュメを作成し、グループで討議するなどベーシックな学習をもっとさせるのが良い。

報告3) 対話型講義による教育改革 (千葉大学 小林正弥)

今の大学生は「意見を言いなさい」と言われても、正解と確信できずよくわからないときには何も話せなくなる。○か×ではなく、自由に発言して発言の違いを議論するというスタイルは、日本の教育機関ではあまり実践されなかったからであろう。自分の発言が少し素朴なものだと思われても、発言することによって議論が展開していくことを学生に知ってほしい。対話型講義で学生に求められるのは、自分自身で思考してその結論をきちんと説明できることである。

学問とは、もともと内発的なものである。学生のやる気を引き出すのが教員の務めである。教員はこのような教育のアートを身につけていくことが望ましい。

議論の内容

- ・ 知的関心を高めることが重要
- ・ 自信を高めることが重要
- ・ 動機付けする工夫が必要. 教員よりも上級生が刺激になる.
- ・ 色々なレベルの学生がいる. 学生がどのように学んでいるのか, どこで停滞しているのかを見極め, それと向き合う覚悟 (研究を 20%減らす) が必要.
- ・ 授業アンケートは, 形骸化しているので, 改善した. 授業の技術面のアンケートは前半に行い, 結果はその授業に活かす. 技術面以外の教員 - 学生間のコミュニケーションツールとしての活用がより重要である.

◇研修に参加して

どの授業方法も全ての学生に対して成果を上げる訳ではないこと, どの授業方法もいくつかの学習ステップを積み重ねて成立していることを認識させられた. たとえば, あのハーバード大学のサンデル教授の対話型講義も, 少人数のゼミで学生が力をつけたところで成り立っている授業だと言う.

目指すことに合致した授業方法を取り入れ, さらに評価・改善するたゆみない取り組みに加えて, 学科単位で共通の目的のために協働することがもっとできるのでないかと刺激を受けた.

2.5 学術教養センター（朝日百百代・島田洋一）

本年度実施した授業評価，授業公開，FD 研修を以下に報告する．

2.5.1 授業評価

巻末に掲げた授業評価結果の図（重要項目の経年変化）と平成 22 年度後期および平成 23 年度前期における授業評価の教員のコメントから次の点が読み取れる．

- ・FD 開始後の数年間に評価が向上し，本年度の前期は「授業方法」，「内容理解」「関心」および「意欲的」の全てにおいて，昨年度よりわずかに上昇した．一方，授業評価の後期において，2008 年度以降からわずかに低下の傾向が見られている「内容の理解」は，本年度も昨年よりも僅かに 0.02 の低下が認められた．後期開講授業の「内容の理解」におけるここ 4 年間の僅かな低下の傾向の原因について分析し，対策を立てることが必要であると考えられる．

- ・100 人以上の大人数講義と 60 人以下の小講義室での授業評価もここ 5 年間例年と同じで，大講義室での評価は小講義室でのそれらよりも共に 0.15 程度低い．ただ，本年度の 100 人以上の大講義室での授業評価は，前期では昨年度よりも全体に 0.02-0.04 上昇しているのに対し，後期では「意欲」および「関心」において 0.03 の低下が見られている．上記の学術教養センターの後期開講授業の「内容の理解」におけるここ 4 年間の僅かな低下傾向と 100 人以上の大講義室での授業評価のわずかな低下傾向の原因については，学年，学部，学科等の全体的視点から解析し，対策を立てることが必要であると考えられる．一方，授業評価での学術教養センター全教員のコメントを見てみると，学生の「授業内容の理解」が 3 を下回っているとのコメントが 4 講座ほどあり，ここ 4 年間の学生自身の学力および理解力との関係からの分析も行う必要があるだろう．

特に一般教育においては，100 人以上ときには 300 人もの学生を対象に，多様なテーマについて講義内容を的確に理解させ，強い関心を持続させるためには，現代的問題意識と絡めた創意・工夫やプロジェクターや VTR を使用した教材の工夫およびパワーポイント資料を交えた解説等が必要となる．オムニバス授業「日本の文化と社会」（2010 年度前期初開講，学術教養センター教員 12 名が担当）は，毎回 300 名程度が受講し学生の授業評価も前年度と比較して，「授業方法」「学問への関心」「総合評価」は少し高くなったとの担当教官からのコメントもあり，今後の大講義室授業の授業設計や授業運営を改善する上で，パイロット的試みとして参考になると思われる．

- ・一般教育は大人数講義が多いこと，必修科目や選択必修科目を含むことを考えると，ここ 5 年間の「総合」，「関心」および「内容理解」は安定して 3.1 - 3.4 を維持しており，高評価と言えるけれども，特に上記に述べた後期開講授業の「内容の理解」における僅かな低下傾向と 100 人以上の大講義室授業と 100 人以下の小講義室授業における授業評価の差の実態を踏まえて，「学生の理解力」のレベルの相違に対する「授業方法」や「授業内容」における創意・工夫を行い，授業評価の向上を図ることを心がけることが，一般教養科目の宿命でもあり，課題であると考えられる．

2.5.2 授業公開

授業公開は、この3年間随時公開とし、担当教員に事前連絡のうえ参観することを原則としている。今年度も学術教養センターの方針で随時公開という形で進めることが決まり、経過を観察した。2011年度は、このことによる積極的な参観報告は提出されていないが、オムニバス形式授業の担当者は次のようにコメントしている。『前期に開講されている「日本の文化と社会」は、オムニバス形式で、学術教養センター教員の12名が関わるものである。オムニバス形式で初めて開催された2010年度においては、担当教員の多くが、自分の担当時間以外にも授業に出席し、「自然な授業公開」が実現していたのだが、2011年度はほとんどの教員が継続して担当しているためか、自分の担当時間以外に授業に出席する教員はほとんど見られなかった。形式が大きく変わらないかぎり、今後もこの傾向は続くと思われるので、オムニバス形式の授業以外にも積極的に授業公開を拡大させる必要があるだろう』（オムニバス授業、津村文彦准教授による）。また、元FD委員の菊沢教授は次のように指摘している。すなわち、授業を公開することや授業を参観することは、当初はとても効果的であるが、その後は必要と感じる時々によれば十分である。一方、授業を公開したことがない、あるいは参観したことがない教員にとって授業公開や参観は荷が重いと思われる。ただ、一度でも参加すると得られるものも多く、教員の交流も生まれることもわかっている。授業公開は主体的にやるべきことである点を留意しながら、その効果や方法について意見交換しながら進める必要があるだろう。

オムニバス形式、オムニバス形式以外の100人以上の大講義室授業および100人未満の講義室授業、そしてゼミ等の授業公開への自主的な、積極的な参加は、各教員が授業を行う上で、どのように創意・工夫をしているかを参考にさせていただき、授業改善の向上を育むことができる機会であり、またその一方で、授業参観していただくことによって、授業方法等の授業改善への関心を高めることが期待されるものである。本年度は学術教養センターとして、積極的な授業公開のスケジュールは組まないで経過を見てみることにしたけれども、次年度の学術教養センター部局での授業公開の方向性を確認することが課題とされた。

以下に、「授業評価」の「教員のコメント」から、本年度の平成23年度前期授業および平成22年度後期授業での「改善すべき点」、「成功した例」あるいは「苦労している例」をいくつか抜粋し紹介する。

- ・ 今学期から毎回リアクションペーパーを実施し、その回答をまとめて翌週にコメントするという地道な作業をして、肯定的評価を多く得られた。
- ・ 今年は特に受講者数が多く、登録者が300人近かった。授業は主に資料の配布と板書によって進め、一部では、プロジェクターでグラフをうつして大きな画面で見たり、VTRを使ったりした。
- ・ 前年度は後期で開講し、学生の評価で、理解できなくて、関心も高まらなかったという学生はあまりいなかったが、受講学生間で、興味、関心度と理解度に差があり、前期に開講する場合には、特に1年生に対しては専門的な詳しい講義内容よりも、興味を持

たせることに重点を置いたわかりやすい内容にして講義を進めることが、教育的には良いと考えられ、講義内容の工夫を重ねたいと思います。

- ・ 担当教員を代表してのコメントです。数値評価を前年度と比較すると、「授業方法」、「関心」、「総合評価」が少し前年度より高くなりました。自由回答では「毎回違う先生で違う内容についての講義で飽きずに楽しく出席できた」、「毎回先生が違って、当然授業内容も違って、とても面白いシステムだった」という肯定的な感想が多かった一方、「何をいいたいのかわからない時があった」、「授業同士のあいだで関連性があると言いつつ、関連性が見えづらかった。教員同士である程度打ち合わせてほしい。」などの意見がありました。個々のトピックは独立しているのが前提の授業ですが、もう少し他の教員の授業に注意を払わないといけませんね。
- ・ 映像などをたくさん見せる授業なので、好印象をもってもらえたと思うが、講義内容に対してまじめに取り組んでほしかった。
- ・ 授業内容の理解度が3を下回っている点については、内容が複雑なので、もう少し工夫が必要かと思う。が、授業への意欲を示す数値が3前後と、自分の担当する他科目と比べて低い点から見て、この講義に対する意欲の低い学生も多々存在する。一方で、自由記入欄には好意的なコメントを書いている場合が多い。「先生が厳しくて授業に集中できてよかった」というコメントなどは、まじめに受講する学生の意欲を阻害する要因を排除するよう、教員が努力せねばならないことを如実に表している。志の低い学生に評判が悪いことは、決してマイナスではない。
- ・ テキスト外の話に興味をいだく人が多いので次回は、原発とエネルギーなどテキストにないものを追加します。教室の不備（スクリーンが見えづらい）という指摘があり、できるだけスライドを工夫します。
- ・ 大講義室での授業で、100名以上の参加者があった。授業では主に配布資料と板書を使って講義をした。参加者の意見としては、分かりやすかったという指摘があった一方で、声が小さい・板書の文字が少し小さい・私語があった・プロジェクターをもっと使ってほしい等の指摘があった。人数が多いのでやりにくい点もあるが、より分かりやすいものになるように工夫していきたい。参加者に、授業の分野により関心をもってもらえるようにすることも、今後の課題としていきたい。
- ・ 期末試験の結果（特に知識を問う問題）はあまり良くありませんでした。授業で学んだ知識をきちんと記憶してもらうための新たな工夫を考えてみたいと思っています。
- ・ 例年行っている「質問カード提出+次回の授業で解説」という方法も好意的に評価してもらっているようですので、今後も継続したいと思っています。
- ・ 最初機械操作に手間取ったことがあったことから、「欲を言えば、教員が機械類をより簡単に使える環境にした方がよい。」という指摘がありました。DVDプレーヤーでは再生箇所をすぐに提示するような操作が難しいので、コンピュータも持ち込んで使用し、その後操作にも慣れましたが、やはりDVD教材の使用には、スムーズな機械操作が必要だと実感しました。
- ・ 100名を超す大講義室授業のうえ、関心の有無に関わらず受講させる必修講義のため、

自前の教科書をつくり、LMS を使って工夫をしています。しかし、関心が高まる人とそうでない人が両極端であることが、高い母標準偏差（0.8 から 0.9）から明らかです。この対応は難しいので担当する他の教員と相談しながら改善を図ります。

- ・ 昨年度に比べ「理解度」の点数が下がっていたことが残念でした。本講義の内容は、予習復習無しで理解するのが難しい單元もあるかと思いますが、学生が自主的に学習し易いように、LMS に講義資料や関連情報を掲載し、オンラインテストを設けています。今後はより多くの学生にこういった教材を活用して貰いたいと思っています。

以上、本年度の大講義室授業を多く含む一般教育科目の実際の改善点、成功例そして反省点を考慮すると共に公開授業(随時公開)へのより積極的な参加を推進し、次年度へ向けての「授業方法」および「授業内容」の創意・工夫および改善に更なる努力を重ねていくことが必要であると考えます。

2.5.3 FD 研修

学術教養センター独自の研修イベントはなく、授業公開同様 F レックスの研修事業に参加した。以下の通りである。

○ F レックス主催 FD 合宿研修会

日 時 2011 年 8 月 26 日～27 日

会 場 福井県立大学小浜キャンパス

参加者 山川 修 教授

研修会報告 山川 修

第 2 回 F レックス合宿研修会 in 小浜に参加して

学術教養センター 山川 修

2011 年 8 月 26 日、27 日に、福井県立大学小浜キャンパスを会場に、第 2 回 F レックス合宿研修会が開催され参加した。スケジュールは以下のものであった。

1：講演「専門分野と対話力を考える」

◆加納圭氏（京都大学）、水町衣里氏（京都大学）による講演

「どう捉える？ 国民との科学・技術対話」

◆佐分利豊氏（福井大学）による講演

「アメリカにおける新しい数学教育

-- すべての子どもにとって接近可能な数学教育をめざして --」

2：スキルアップ講座

「伝える力を養うーサイエンス・コミュニケーション・トレーニングー」

加納氏・水町氏・元木氏

3：講演「キャリアプランを描くには？」

◆中里弘穂氏（福井県立大学）による講演

「高等教育機関におけるキャリア教育の導入と課題」

◆小川明彦氏（株式会社大津屋 社長）による講演

「企業が考えるキャリア教育」

このうち、1と2は、26日に開催され、3は27日に開催された。

「専門分野との対話力を考える」の最初の講演は、サイエンスコミュニケーションの概論であった。普段から学生向けに講義をしている身であるが、「双方向」を常に頭に置いているかといわれると、反省しなくてはいけない点多々あるように感じた。2つ目の講演は、最近米国で台頭してきているリアルワールドマセマティックスといわれる、ストーリーを持って数学を教えるという話であった。私が教えているのは数学ではないが、他の分野でも同様な取組ができるのではないかと考えさせられた。

2のスキルアップ講座は、サイエンスコミュニケーションの実習編で、グループワークを通して、双方向性やコミュニケーションのやり方を学ぶという講座であった。地図を見せあわないで、道案内をするという奇抜なゲームを実施し、予備知識が違う人へ、正しく道案内する難しさを実感した。こういった、相手と自分が違う常識を持っているということを意識することから、コミュニケーションは出発すべきなのであろう。

3はキャリア教育に関する講演である。最初の中里先生は、福井県立大学キャリアセンターの副センター長で、キャリア教育全体を分かり易くお話しいただいた。2つ目は、大津屋社長の小川氏の講演だが、簡単なゲームも含み、なかなかおもしろい構成であった。特に、商工会議所が熱心にキャリア教育に取り組んでおられるというのは、大変新鮮だった。この後、商工会議所青年部、青年会議所等の主催による、福井キャリア教育フォーラムも、自治会館で開催され、今後、企業と大学がキャリア教育で連携する糸口になったように思う。

3. 点検と課題

生物資源学部 加藤 久晴

3.1 授業評価

(1) 授業評価アンケートの実施

2011年度より、授業評価アンケートの質問数を従来の18項目から重要である5項目（Q1この授業に意欲的に取り組みましたか：「意欲的」、Q2先生の講義の方法はどうでしたか：「授業方法」、Q3授業中の内容はどの程度理解できましたか：「内容」、Q4この授業の分野への関心は高まりましたか：「関心」、Q5この授業を総合的に評価して下さい：「総合」）に減らした。これは、学生の負担を減らすことによりアンケート結果の信頼性が高まることと、自由記述欄の充実を期待したものである。なお、アンケートの実施方法（期間、回答時間等）は従来通りである。

(2) 授業評価結果の経年特性

上記の5項目について、2006年度以降の部局平均値の経年変化を図1（前期）および図2（後期）に示した。なお、2009年度より海洋生物資源学科が学部化されたことから、それ以前のデータは生物資源学部全体（生物資源学科と海洋生物資源学科）のデータを両学部で便宜的に使用していることに注意されたい。

経年変化に対する部局ごとの点検・対応等は各部局のFD活動の項に記述されているので、そちらを参照していただきたい。

データに示されたほぼすべての年度において、授業の質に関係する「総合」は高く、学力に関係する「内容」が低く、教員と学生の両者に関係する「関心」はその中間に位置する傾向が見受けられる。2011年度の前期においては、すべての学部において微増あるいは横ばいであることが見て取れるが、後期においては経済学部および生物資源学部は微増あるいは横ばい、そして他の学部では微減となっており、中でも海洋生物資源学部の後期における減少が目立っている。

(3) 課題

今年度は新アンケートによる授業評価を開始して2年目であるため、それ以前のデータと単純には比較できないかもしれないが、2006年以降「内容理解」が常に低いレベルで推移しており、年度ごとに漸減している学部が見受けられることが懸念される点である。授業改善は毎年進められているにも関わらず、このような状況が続いていることに対して教員は真摯に受け止める必要があると思われるが、学力の低下を多くの教員が感じており、学生側にも原因があるのは確かであると思われる。いわゆる「ゆとり教育」を経た学生に合った授業方法を検討・実施し、学生のポテンシャルを引き出してゆく工夫が必要なのかもしれない。

以前より、学生による授業評価結果の信頼性に対する疑問が上げられているが、その原因

の1つがアンケート項目の多さによる学生の負担にあることが考えられたため、2010年度より項目を大幅に減少させることになった。しかし、数値として打ち出される評価と授業内容が乖離しているという意見を相変わらず耳にすることが多く、しかも自由記述欄には空欄が目立っている。そのため、教員側としては結果に対して懐疑的になり、コメントによる回答が義務化されても形だけに終わってしまう可能性も否定できない。これまでに、授業評価にはさまざまな問題提起がなされており、その内容や方法に対しては検証や再検討などが望まれているが、2011年度第3回会議議事録にもあるように、学生が真剣にアンケートに答えてもらう手段を検討し、評価結果の信頼性を高めることが重要であると考えている。福井大学や福井高専のように、記名式（あるいは学籍番号を記入）にすることも今後検討する必要があるであろう。

3.2 授業公開と研修

本学における授業公開は2004年度後期に全学的に開始され、2007年度から各部局の実情に即した内容により実施されるようになった。例年、公開を実施した教員および参観した教員からは授業公開が役立ったこと、特に新任教員にとっては大変役立ったという感想を得ている。一方で、どの部局においても参加者が少なく、メンバーも固定され、マンネリ化が進んでいるというのが現状である。本学においては2012年4月より新しい教員評価制度が試行され、そして次期中期目標・中期計画策定において、大学改革構想委員会からは「他の教員の講義を自由に聴くことができる環境づくり」「授業見学や面談を通じた教員の公正、公平な評価」などが具体的な取り組み例としてあげられていることから、授業公開・授業参観の義務化は今後教育学習支援チームの最優先課題となるかもしれない。しかしながら、義務化をすでに実施している他大学の様子から判断すると、これも一時的な対症療法に終わる可能性も否めない。一過的な取り組みに終わらない工夫や、各教員の自発的な改善を促すために評価の高い授業を全学的に公開することなども検討すべきであろう。

本年度の研修に関しては、障害学生修学支援研修会への参加を除くと、昨年度同様あまり活発とは言えない状況であった。フレックス内のFDチームの企画による第2回FD研修会が小浜キャンパスにおいて行われ、小浜キャンパス教員が15名、福井キャンパス教員が2名参加した。研修会の一部はネットワークを介して福井キャンパスでも視聴できるようにしていたが、中継の視聴者は3名にとどまった。アナウンスは複数回行ったが、夏期休業中であったこと、中継した講演内容が自然科学系であったことなど、やむを得ない面もあったことは否めない。

多くの委員にとってFD活動は専門分野ではないため、研修を企画することは難しいと思われるが、企画・実施される研修には積極的に参加してもらう工夫が必要であろう。本学以外でのFD活動に触れる良い機会であり、FDに対する意識が少しでも高まることを期待したい。

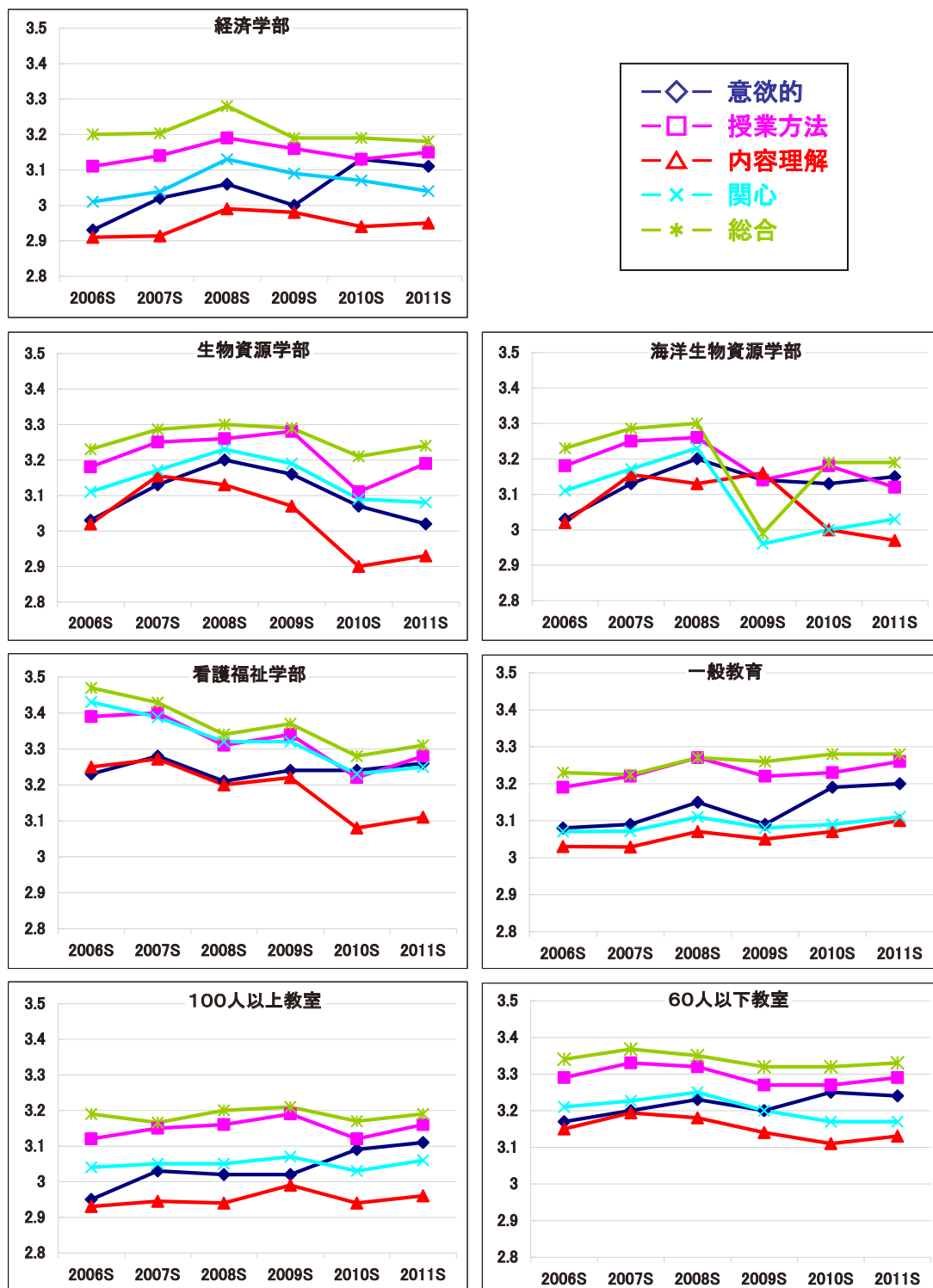


図1 重要項目の経年特性（前期）

（注）

- ・「意欲的」は学生の授業に対する意欲、「授業方法」は授業の進行方法、「内容理解」は学生の満足度や学力、「関心（が高まった）」は、教員と学生双方の努力、「総合（評価）」は授業の質、に各々関係していると考えている。
- ・軸の数値 2006S の S は春学期（前期）を、次項の F は秋学期（後期）を意味する。

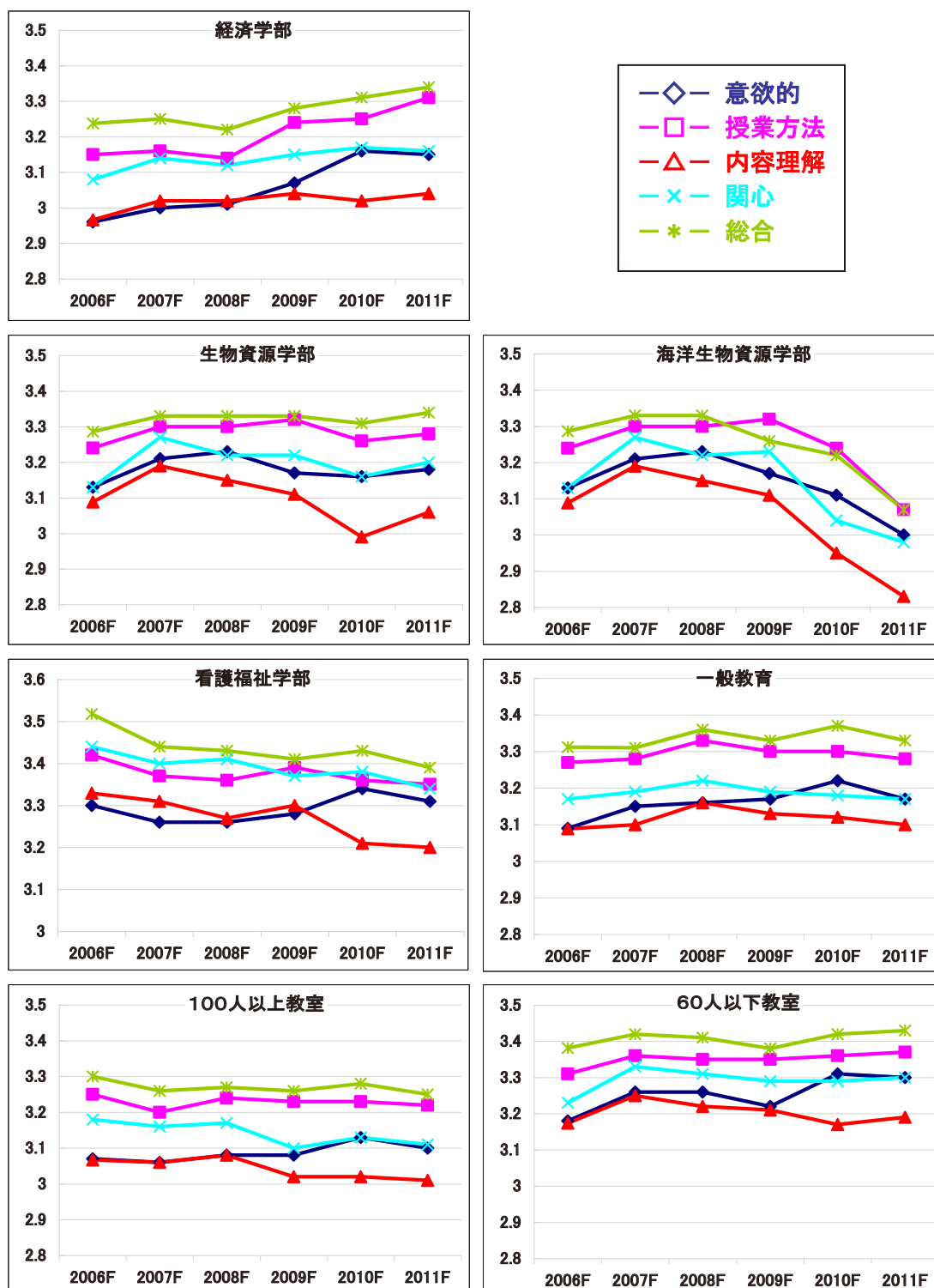


図2 重要項目の経年特性（後期）

おわりに

2011年度より、看護福祉学部の本田先生よりチームリーダーを引き継ぐことになりましたが、これまで受け身一辺倒であった私にとって、どのように活動を展開していけば良いのかわからないまま1年が経過してしまいました。ご迷惑をおかけした点多々あったと存じますが、教育学習支援チームの各委員および事務局のみなさまのご協力により報告書をまとめることができました。この場をお借りして御礼申し上げます。

2010年度のFD活動における議論から、まずは2011年度において授業評価に対するコメントの回答を教員の義務とすることになりました。その結果として、授業評価アンケートを行った授業に関してはすべての教員からコメントを回収できたことは、各教員の授業評価結果を受け止める姿勢に変化が現れたことを示していると思われます。しかしながら、「コメント無し」というコメントを除いた回答率は約8割であり、さらには授業評価アンケートの実施対象であるにも関わらずアンケートが行われていない授業があるため、必ずしも喜ばしい状況であるとは言えません。

以前より、日本の大学生の勉強時間は国際比較において短いことが懸念されており、本学においても2010年度および2011年度に行われたフレックス学生アンケートの結果から、授業外の自主学習をしている学生が非常に少ないことが示されています。社会が求めている「学生の質」を保証するためにも、キャリア教育などを介して早い段階から大学でやるべきことを意識させ、主体的・自発的に行動ができるようなカリキュラムを検討する必要もあるでしょう。また、発達障害などを有する学生へのケアなど、これまでの授業では対処できないケースが出てくると考えられます。今後、教育学習支援チームとしても試行錯誤が続くと思いますが、学生の質、そして学生が求めているものを積極的に把握し、臨機応変・柔軟に対応するなど、教職員の積極的なFD活動へ参加を促す取り組みを継続して検討してゆく必要があると考えています。

教育学習支援チームFD担当リーダー 加藤 久晴

ファカルティ・ディベロップメント報告書 2011

発行年月 2012年3月

編集・発行 福井県立大学教育学習支援チーム